

---

# ぶっ壊れた人

明日天気になあれ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ぶっ壊れた人

### 【Nコード】

N0981R

### 【作者名】

明日天気になあれ

### 【あらすじ】

彼に感情はない、悪意も善意もなく、彼には純粋な思考しかない。彼にあるのは一つの想い『人を救う』そのひとつだけで彼は生きている。彼の前では全てが等感覚、『どうでもいいこと』なのだ。それでも彼は人を救う。等感覚なれども人を救う、なぜ？それは自分のため、『泣く顔が迷惑だから』『泣く声が耳障りだから』、辛辣だけど、それは彼の裏返し。彼の『救う』方法は『手を差し出す』だけ、だから人々の求めるような感動の物語なんてありません。彼が手を差し出し、人がその手を『勝手に取る』それだけで物語は進

みます。

## ブローグだよっ

薬の臭い、それだけでここはどこかの医療に関係のある場所だと理解できる。

そのために、一人の少年の横に点滴が置いてあり、透明の袋からはポタポタと水滴が落ちているのが見えた。

——少年。

彼の名前は『じゅうい流導 まね正義』。

12歳、通常ならば小学校六年で誕生日を迎えていただろう年齢だった。

——そう、だったのだ。

通常ではない、彼は今、とある研究機関にいた。それは正常ではなく異常。

政府で認知されてるのではなく、見てみぬフリをされている場所。合法という皮を被った非合法、例えるならそう言えるだろう。

6歳のころ、この研究所に『売り飛ばされ』、そこから始まったのは6歳に本当にするのかどうか、誰もが目に疑う用な人体実験。  
それもこれも、彼の異常性アブノーマルからくるものだった。

『ジ・レヴオルション  
進化』

その力は、異常性でさえも『自らの力』とし、そこから『他の力でさえも進化させる』。

つまり、ひとつひとつの力を孤立させるのではなく、協調させ、さ

らに力を強めていく。  
アブノーマル  
そういつて異常な才能。

それを彼は持っていた。  
故に両親から怖がられ  
故に彼は、売り飛ばされた。

——彼はもとより心優しき少年だった。

ちゃんとした意識ができあがったときから、ちゃんと心優しく。幼  
い児童だからこそできるような、生き物に対する行動、言わば、足  
をちぎったり、蟻の巣を水没させたりすることはなかった。  
ちゃんと心優しく、笑顔がかわいい少年、だけど…異常。  
アブノーマル

肉体は、まだ片方の手で数えられるほどの歳で、オリンピック選手  
を軽く超えるほどの肉体を持っている。

それは、周りから恐怖されるには十分だった。

だから、売り飛ばされた。

自分をまるで人間と思わない視線に少年は恐ろしく思った。  
だが、少年はとある一言で怖がりながらも一步を踏み出した。  
奈落の底へと、自分自身であるきだした。

『これでたくさんの人が救える』

完璧な人間を作る、そういつて名目。

『とある出来事』があつたせいで、彼は心優しさと共に、人を救うといった目標を持っていた。

——幼い心と、そしてその目標と優しさ。

どんなことになるかなんてわかつてさえいない。

故に、こうなつた。

——ポタポタと落ちる水滴。

点滴の道具。

針が突き刺さる少年をみる。

真っ白な髪。

そして光を映し出さない瞳。

そして彼の周りには、大量の死体があつた。

その死体には、自らが斬つた以外の傷しかないものと、なにも傷がないものしかなかった。

アブノーマル  
それだけでも異常

そして彼の周りの死体は、二通りの死に方があった。

1つ目は、泡を吹いて目を白目にして死んでいる。  
ショック死、彼らに何があったかなんて知らない。

2つ目は、…自殺。  
首を吊り死んでいるもの、頸動脈を自分で切って死んでいるもの。

その中で、彼は周りを一瞥したあと、すうすうと規則正しい寝息を  
たてて、寝始める。

この血生臭さを感じてないのか、それは否。  
『彼は、その血生臭さを感じていないのではなく、どうとも思っていないのだ』

何度精神が壊されただろう、何度生死不明の重体になっただろう。  
何度拷問のようなものを受けさせられただろう、何度狂いかけただろう。  
何度憐れみをもった視線をぶつけさせられただろう、何度叫んだだろう。  
何度殴られただろう、何度爪を剥がされただろう、何度骨を折られただろう、何度地面に頭を叩きつけられただろう。

この過負荷が生まれたのは、まだ残っていた人の心によるものだろう。

今はもう、彼に感情とよべる感情はない。

『きっと彼は友情なんかで感情が元にもどるなんてことはない』

『きっと彼は何をされたとしてもなにも感じない』

『きっと彼は——永遠に奪われたままだ』

彼は警察のパトカーの音で目を覚ます。

それでも彼の表情は変わらず、音が止まると寝始める。

ゆっくりと、ゆっくりと彼は寝る。

## 主人公設定

### 【名前】

流動正義  
りゅうどうせいぎ まやみ

### 【性別】

男

### 【容姿】

真っ白な髪、死んだ目、顔は整っているが、カッコいいわけじゃない、どっちかっていうとかわいいより。それも死んだ目で台無し。

### 【性格】

昔は優しくかったけれど、今は感情がないせいで空気が読めない、でも周りの人からはやさしいと認知されている。

### 【異常】

ジ・レヴォルション  
『進化』

めだかの、完成とは違うが、凌駕するようではないようなもの。言ってしまうば無限の可能性をもつ能力。

異常だろうが特別だろうが、それを受け取り、経験値として、蓄積する。

そしてそれは協調性もち、周りの能力をさらにあげる。

平凡でさえも蓄積していき、感情がないので、優しさ、厳しさは蓄積されない。

### 【過負荷】

セルフ・ディフェンス  
『正当防衛』

自分が受けたものをすべて相手に返す。そこに異常も過負荷も関係無い。

攻撃は受けるが、自然治癒力さえも進化してきたので骨が折れても一瞬で治る。

ついでに、これは見てみぬふりをした人でさえも巻き込む。

途中参加でも受けてきたものすべてを返す。

まるごと全てを返す。

ショック死、自殺などの状況は、苦痛によるものと、苦痛から逃れる為にやったもの。

### 【はじまる時の状況】

両親共々首吊り自殺、政府各員ショック死 or 自殺状態、そのニュースのせいでさっぱりと正義のニュースはまったく起こってないために、世間一般にも知られていない。

警察により救われ、精神崩壊によりカウンセリングを受けるが、すべての医師が無理と断定してしまった。

めだか達とは幼なじみ、善吉とめだかのあったあのシーンでいっしょに会って、善吉の言葉に感動して、めだかに「お前が幸せにするんだったら、俺は人を救うよ！」と宣言して、そのまま幼稚園などでもいっしょになって遊んだ。

親友と呼べる仲なのだが、主人公は記憶を失っている。

感情もないため、なにも感じないが、主人公は宣言の記憶をうつすらに残っており、人を救うこと普通とし、感情がないため、感情で動けないために、脳が自らの利益を優先するが、主人公は、自然に理由が完成する。『泣いているのをみていると目障り』『そこにいられると邪魔だから助けた』『自分の利益になるからやった』。

こんなことで主人公は普通死んだ目をしていたりすると、近づかれなくなるが、なぜか愛されている。

「諦めるは利益にならない、やるだけやって利益になればいい。」

「これ以上やっても無意味なのか決めるのは僕の脳。」

「邪魔だから助けた、それだけ。」

「泣いてる顔が目障り、だから助ける。」

そんなことを言ってさっくり助ける主人公。

ツンデレっばいけど絶対に違う。そんな主人公。

『名瀬天歌』（前書き）

この物語は、世界一感情崩壊した中学生の、流導正義が、もはや本能の域と化した救済本能と共に戦う（？）愛も正義もない屁理屈だらけの物語である。

## 『名瀬天歌』

ポツン、という音が、漫画ならでてきそうな状態。  
周りは騒がしく、ひとりで正義まことぎは本を呼んでいる。

感情がないために、寂しいという感情からの、友達を作らなきゃ  
どの感情は一切ない。

だからこそ彼はそこにひとりでいた。

いや…理由はそれだけではない。

横にいる少女も理由のひとつだ。

一人でいるのではなく、みんなが遠巻きにみている、そんな状態  
なのだ。

——包帯のようなものを顔に巻いた少女がいた。

さて、今の状況までの道のりを話そう。

無事、研究室から助け出された、…いや、違う。

助け出されたという名目のもと、被害者という自分を作り出した。

正義またひは利益を考えた結果、被害者として振る舞うことを決めたのだ。  
そっちのほうが自分に害が及ばないからだ。

その結果、俺は医師の検査を受けて、『感情の欠落』『精神の崩壊』『肉体的虐待』などと色々と診断されたりした。

そこでカウンセリングを受けたのだが、すべての医師が匙を投げた。治らないからではない、『異常』を感じさせないのに『異常』なのだ。

だから何をしたいのかさっぱりわからない。治らないのではない、治せないのだ。

薬物投入などを受けるが、さっぱり変化もない。

故に、医師全員が断念したのだ。

その結果、定期的な検診を義務付けられ、施設に送られた。

普通、元の親に返されたりしないのだろうか？などと思うだろうが、それはない。

たとえ法律がどんな方向にいったとしても、正義は絶対に施設に入れられただろう。

親がもういないのだから。

首吊り、その状態で発見されたらしい。

そういわれても正義は何も感じないし、顔の筋肉に一切の変化もなかったけれど。

そうして必然的に施設へと送られた。

そこでいつの間にかできていた妹と出会ったが、妹は正義まひきをチラッとみただけで顔を伏せた。

誰でも起こりうるであろうこと、親が死んで悲しい、という感情だ。だが正義まひきはそんなことはさっぱり起こっていない。

感情がない上に、記憶さえない、そんな彼に悲しめというのは無理な話。

そもそも、正義まひきがこうなる原因である両親に、正義まひきがたとえ欠片の感情でさえも残っていたとしても、悲しみなどしないだろう、きっと、心の奥底でざまあみるとも言っているだろう。

さて、そして冒頭に戻る。

戻れば、ポツンと座っている状況と、隣にいる包帯（仮）少女についてだ。

彼女の名前は『名瀬天歌』利益しか考えない脳により、『必要があるかもしれない』ために、正義まひきは、全校生徒を一晩で覚えてきた。

故に、彼女の名前を知っている。

だが、話しかけないし、話しかける理由もないし、話しかけて何か利益がでるとは思っていない。  
だから沈黙のままなのだ。

中学生という年齢だからこそ、今ここにいるわけだが、名瀬天歌という存在の異常さと、アブノーマル流導正義じゅうどうせいぎという異様さにより、相乗効果を成し、誰もが近づかないのがこの状況だ。

名瀬天歌、という存在は、隣にいる正義まさきの存在として認めてはいるが、完全に無視を決め込み。  
じゅうどうせいぎ流導正義は、隣にいる名瀬天歌という存在を認めてなどいないうえに、無視以前にないものとして扱っている。

さて、名瀬天歌という少女と、話すのは一週間も立たない日だった。彼女は、三日と立たずにいじめられ、正義まさきという存在はないものとして扱われる。そんな状態をもって、正義まさきの脳は、横にいる、いじめられている名瀬天歌という存在を邪魔として認定した。

だが、名瀬天歌という存在を消すわけにも行かない、いや、犯罪者として認定されてしまつては不利益を被るために、正義まさきはいじめという存在を排除することを決定し、特定し、そしてそれらすべてを暴き、そして証拠をつくりだし、学校側に提出した。目をつけられては困るために、当然のごとく匿名だが。

当然のごとく、ここまでの証拠というものを突きつけられれば、嫌でも学校側は動かなければならなく。いじめの主犯格は早々に取り押さえられた。

それにより、いじめをされた名瀬天歌という目障りな存在は消えたのだ。

そこに正義感というものはさっぱりなく、正義<sup>まさき</sup>はただ目障りだからという理由で、良くもわからず本能のままに、良くも悪くも人を救ったのだった。

そして数日がたったある日だ、正義<sup>まさき</sup>がいつもどおりにひとりぼっちで本を呼んでいると、声を掛けられる。

「おい」

その声は名瀬天歌のものだろう、と思い、当たり障りのない返答をして終わりにするために、振り向く。無視しても後々目を付けられるだけであろうから。

「なに。」

「なんでさー俺を助けたんだ？」

「目障りだから」

正義<sup>まさき</sup>はおそらく本心を告げた。利益などを考えてう色々と嘘八百を

並べ立ててもよかったのだろうが、どうせ見破られるだろうと、本能が告げていたため、指摘されて返答により無駄な酸素を使うのは不利益だと考えたからだ。

するとなぜだか名瀬天歌は笑い始める。

周りの人間がこちらをみるが、すぐに恐怖で視線を外す。

「異常アブノーマルがいるってことはわかってたけどよー、ここまでとは知らなかったぜ」

「そう、それで？」

「いや？、ここまで壊れちゃったものをみるのはさー、初めてなんだよなー。」

「そうか」

話は終わったものとして正義まじつは本へと視線をうつす。

名瀬天歌はそれを見て、面白いものをみつけた、といった目をしていた。

『妹』前編（前書き）

ひとつひとつが短いから長くしろ、というのは無理ですね。  
こんな書き方を書くためにいろいろと考えるんです。  
だからすごい力使ってます。

## 『妹』前編

頬が痩せ細ってきている少女がいた。

名前は、流導志恩。しゅうどうしおん

学校から帰るとき、今日は休みだと知っていたので、遊んでもらおうと走って帰ってきた。

元気良く「たっだいまー！」と言いながらドアを開ける、そのときだった、両親の体が空中に浮いているのをみたのは。

意味がわからず近づいてみると、ひどい臭いがして、顔をしかめるが両親が心配なので、志恩は構わずにそのまま走りよった。

——そして両親が死んでいるのをみて、志恩は死体から出てきた汚物が下にあることも構わずに泣き叫び、死体を下ろそうと必死になった。

近所の人々が駆けつけてきては、叫んで志恩を、死体を下ろそうと必死なっている志恩を死体から引き剥がそうと彼女を思い切りつかむ。泣き叫びながら志恩は抵抗したが、大人と子供、すぐに取り押さえられる。

小学校一年生と大人、その差は当然ことだった。

取り押さえられ、尚も泣き叫ぶ少女はやってきた救急車に運び込まれ、そのまま連れていかれる。抵抗も無意味と幼いながら知り、そして、泣き叫び、必死になって動き回った志恩の体は疲れきって、そのまま動くということを止めた。

——その後親が死んだことを知り、すでに理解していた志恩はそのまま、その場にいた医師たちが危険視していた精神が不安定になつて暴れ回るということはなかった。

それは暴れ回るといことがなかっただけで、精神は不安定になっていく。突風が吹き荒れれば壊れていく砂場で水の含んでいない砂でできた山のように。

「は、い。」

小さく、ゆっくりと漏らした言葉は、自分の精神を不安定にするために、他のことに気をそげないからだ。

そして、医師たちから放たれた言葉は、そんな志恩の精神を知ってはいないからこそ言えたような言葉だった。

「あなたには、お兄さんがいるの。それでお兄さんは——」

医師と警察の方々の説明は、まさに突風だった。ガラガラと崩れる精神の音を聞いたような気が、志恩には感じられた。

違法の研究所で色々なことをされてきていた、その言葉は簡略化され、そして言葉を選んでいた。

小学校一年生、まだ大人とは程遠くても、その言葉の意味はおぼろげながらもわかった。

ひどいことをされていた、それは、なぜ？

そのお兄ちゃんという人が誘拐されたというのに、両親から搜索願を出された気配もなく、そして自分自身もそのことは全く知らない。両親である彼らは、まるでいなかったかのように扱い、そして普通に暮らし、志恩を育てた。

志恩は、頭が整理していくたびに、自分の中が壊れていくのを感じた。

自分の中の両親の笑顔が崩壊し

愛情が崩壊し

日常が崩壊し

両親という存在が崩壊した。

幼いながらもわかった。

『両親は兄が誘拐されたのは認知していた、そのうえでないものとして、私を育てた。』

可能性というものがたくさん頭に浮かび上がり、それは最悪なものばかりだった。

『両親が売ったのではないか』その出てきた答えは、満点の大正解なのだが、それを告げるものはいない。いや、誰もこの幼い少女に告げられない。

——だからこそ少女が壊れていった。  
良いような解釈をして心をつむぎ、悪い解釈をして心が壊れていった。

それを何度も何度も繰り返していった。両親がいたら、泣き叫びながら真実を聞きたかった。

だから、全てから逃げた。

何も答えを出してくれないからこそ、その狂い続けるサイクルから逃げ出した。

そして何も考えないように、意識を閉じていく。

兄と呼ばれた少年をみたことはある。真っ白な髪で死んだような目をしていた。

そこからどれだけひどいことをされたのか読み取れる。

だからこそ、もうすでにいない両親に問いかけた、それを知って、

あなたたちは平気だったのかと。

そしてすぐに逃避した。どうせなにも返ってこないから。

逃避をし続けていると、ある日視界の中に手が見えた。  
職員が心配になってまた来たのではないかと思い、無視をしようと思っただが、なぜか気になったので顔をみてる。

そこにいたのは、兄だった。

兄はおもむろに口を開けると、一言だけ行った。

「迷惑なんだけど」

そう言った一言の意味がわからなくて、志恩は一瞬思考停止した。

「な…にが…っ」

志恩はすぐに怒りがわいてきて睨みつけるように行っただが兄は目が死んだままだ、なにも変化もない。頬の筋肉をピクリとも動かさない。

「何故、そんなことをやっている」

「うるさいっ何もわからないくせに！」

志恩は、兄の言葉に瞬時に爆発し、そして逃げだすように走り出す。自分でやっというてすぐに後悔したが戻ろうとはしなかった。

目にうつることのない階段脇で体育座りをして後悔を必死に押さえつけた。

嫌われた、絶対に嫌われた、そう思っていた。

だが、それは、その考えは簡単に打ち消される。

――次の日

少年はまた、少女の前にいた。

## 『妹』前編（後書き）

はつきり言おう

最強だけど、最強性ははつきされないと

主人公は『救う』という約束から本能的に助ける行動をしているだけあって、漫画のように『人を助けるのに理由はあるのか？』なんて言いませんし、やさしい主人公だと思っているなら大間違い、辛辣な言葉はかけるし、何でも言う。

そもそもめだかボックスとか書かれているけど、異常という設定がほしかっただけで、原作が始まるまでは主人公が人を救い続ける行為をひたすらに書いているだけです。

『妹』後編（前書き）

いじめ問題ってありますがねー兄さんがなったことあるんですよねー最終的にぶち切れて授業中にも構わずに、糊でベリベリに張付けられた教科書をいじめの主犯格にぶつけて、マウントとって、「君がッ泣くまでッ僕はッ殴るのをやめないッ」っていつて殴り続けていたらなくなっただけです。その後両親にボコボコにされるけどクラスのお笑いの存在になったそう。な。

ま、そんな簡単にいくやつもいくやつですけど

## 『妹』後編

「なん、で。」

流導志恩は、差し出された手に茫然としながら彼の顔をみた。兄、名前は正義。いつみても目は死んでいて、それでもその差し出された手は、取ってしまいたくなるような暖かさを感じられた。

「迷惑だから。」

彼の言葉はひどく辛辣だけど、そこには見え隠れする本心が見えて、目は死んでいるのに、その言葉はひどく優しく感じられた。涙を思わず流しそうになり、顔をうつむかせて、泣いているのをみられないようにする。

声がでそうで、それを必死に抑えて、それでも少年は手をピクリとも動かさず、ずっと手を差出していた。

「ひどいこといったよ…ね。」

「だから」

「なんで、それでも、手を差し出すの？」

「迷惑だから。」

そんなことを聞きたいんじゃない、でもその言葉は心を何故か穏やかにした。その言葉は自分にとって怒るべき言葉なのに、辛辣で、悲しむべき言葉なのに、志恩はその言葉のどこかにあった暖かさを感じていた。

兄である正義を、チラツと志恩はみた、変わらず、目は死んだまま。

その目には

絶望も

悲しみも

恐怖も

写っていない…いや、なにも写っていないのだ。

虚無、感情の一切も感じられない。その目に恐怖し、気持ち悪いと思った。それでも、そんなことになっていても、正義は妹に手を差し出し続けている。

人を最も慰めるのは、自分よりひどい存在がいるということだ。

その慰めは、『あやまち』というものを何度も犯してしまいそうになるだろう。

でも、それでもそれは人にとって元気づけでもある。

——それでも、彼は頑張っている。

そう思えるから人はがんばれるのだ。そこには正も負も、どちらの

感情が混じり合っているが、それでも人は前にすすめるのだ。

志恩は、気になった。何故この人は、こんな目になってしまうようなことになったのに、その原因になった、親の、そしてこの幸せに暮らしてきた、妹である自分に、何故手を差出しているのか。だから…返答に恐怖しながら、ポツリと声を、かすれてはいるものの、力強く出した。

「憎く…ないの？」

その言葉を発した瞬間に志恩は目をぎゅっとつぶった。返答に耐えられるように、どんな辛辣でも耐えられるように、ただその返答はわかりきっていて、それでもその返答に、志恩は啞然とした。

「死んだ人間に憎悪は必要ない。」

どうでもよさそうに言ったその言葉に、志恩は啞然とした。——いや、啞然とするしかなかった。

感情の崩壊、それを今しがた知った。

そして、それを聞いた瞬間、どうでも良くなってしまった。

「なんで、憎まない、の？」

「憎むことは、わがままでしかない。」

その言葉に、志恩は意味がわからなかった。憎むことが、ワガママその意味がまったく、さっぱりわからなかった。それでも彼の言葉は、まるで頭を撫でる手のように、暖かく、安心していく。

「わが、まま？」

「憎んでも、何も帰って来ない。」

感情などなく、機械的にしか考えられない。『何も帰って来ない』、マンガでありそんな言葉、そう志恩は思った。何も帰って来ない、『復讐などに意味はない』、感情が無い、もしくは第三者だからこそ言える言葉。それでもそれは人にとつての真理だ。

なにも帰って来ない、故にわがままでしかない。人の心の怒りというものを取って付けて、行動する。人の心は、人の心情は言い訳ではない、そう正義まじきは言いたいのだ。何かを奪われてもそれが帰ってくるわけじゃない、それを取って付けて怒りで正当化し、そして不利益を被ると知っていても人はナイフを持って復讐へと飛びかかる。——それがワガママではなくてなんなのだろうか。それは機械的に考えられるからこそ導きだされた考えだった。

とたんに志恩は、とてつもなく、無意味に感じられた。正義まじきという兄に対する、両親から来る心、後悔か、劣等感か、恐怖か、そんな分類ではできないような心が、きれいさっぱりに霧散していった。

それでも彼は生きている

そういった、心の中で現れた言葉に、背中を押された気がする。兄まいという存在に、妹いもうとは、元気づけられなどしていない、ただ、兄と

いう存在を見せつけられ——そして、妹は自らの心を無意味と知った。

ゆつくりと、話しながらも差し出され続けた手を取り、志恩は立ち上がった。

それを見た瞬間に、体を翻し、正義は去っていった。

「まって！」

そう呼びかけて、彼は止まる、顔はこちらに向けない。

「ありがとう、お兄ちゃん。」

言いたかった言葉を言えて、志恩はほっとした。

そして正義はこちらを見ないで去っていく。

志恩はそれを見ながら——兄の手を握った手を、頬に当てた。

## 『妹』後編（後書き）

妹がヤンデレ化した気がする。

ついでに平均文字数2000くらいですかね？

感想を求めます…、正直主人公がアレなんでどういう感じに書けばいいとかアドバイスをくれると。

『横溝桔梗』前編（前書き）

オリキャラを許容できることをいまここで承認しろッ…！ここからはオリキャラの発生ッ…！だからダメなやつはダメ…ッ！

あ、劣等感というものは他者とくらべ劣っていることからくる感情のことを指します。

で、ここでの横溝桔梗の劣等感は、普通の生活と他者から化け物扱いされる生活からの劣等感——ですかね？あれ？日本語難しい。

作者の日本語力の無さに全私が泣いた。

わ…わかりにくいなら言ってください…

『横溝桔梗』前編

——兄、姉、妹、弟  
義理でもなんでもいい

血の繋がりや友達

これを表すのはなんだろうか。  
絆——否。

『劣等感』

それを表すもの、それがつながりというもの。人のつながりというものは、上下関係に包まれている。友情は否定しない。だが友情は何かによって常に否定されている。

『親』の会話、それに続く子供への批判。

それは、友情の否定。

そこから生まれるのは——『劣等感』。馬鹿にされてからわかる、上下関係。誰もつくろうとしてつくったわけじゃないだろう、いや、つくろうとするものもあるだろうが、ごく少数だ。

理解しないで『友情』『絆』というものを破壊する、それは——知らないからこそ罪だ。

だが、丸眼鏡をかけた、地味な少女がいた。黒い、長い髪をもち、手入れされていることを理解できる美しい髪をもった、目に深く髪をかけ、顔を見せないようにする、地味というものを無理やり自分を当てはめようとしているかのような少女。

『よこみぞきぎやう  
横溝桔梗』

その少女がもっている『劣等感』というものは一味違った。

『アフノーマル  
異常』という存在からくる、劣等感だった。

目を瞑れば聞こえてくるようだ。親が親戚が、親類関係者たちがそこそと隠れて、自分のことを『化物』『異常』と話していたことは。

だからこそ、普通に憧れた、彼女は普通をノーマル知っていたから。

何も知らない時期が、とてつもないほどに美しいものに感じられた。

彼女が持っている異常——アフノーマル

それは、『絶対的解答力』。

それはまさしく推理ものの主人公のように、パズルのピースさえあればパチパチッと瞬時にパズルができあがってしまう。

とある黒髪の少女が、誰も解けなかった数式を解く数力月前に、それらを完全にこの少女をがといていたということは、今では誰も知らない。

『絶対的解答力』は、どんなにうる覚えだと言うのにそれを完全なピースとして使用できる。瞬間記憶能力でもないというのに、彼女ききやう

はその知識を、一瞬にしてかき集め、すべてのうる覚えの抜けたピースを『他の知識』をもって完全にする。それは、『忘れかけていた』というものを無くし、少しみたものなら『何時何時でもほりおこせる』ということなのだ。うる覚えのかき集めの状態で、不安定ながらも『完全な知識をもった天才』と呼べるのが『横溝桔梗<sup>よこみぞきぎょう</sup>』なのだ。

『何故彼女だけが』

『彼女ばかり』

『天才とかふざけないでくれよ』

『ああもうみんなアイツと俺をくらべるな』

『なにあいつ気持ち悪い』

『気持ち悪い、おかしい』

『異常だ、俺がダメなんじゃないんだ。あいつが異常なんだ』

『なんなんだよ、本当に人間なのか？』

『気持ち悪い、死ねよ、なんで生きてるんだよ、あいつがいるから比べられる』

『死ねばいいのに』

『なんで生まれているんだろうアイツ、さっさと死ねばいいのに』

『気持ち悪い、気持ち悪い、近づくな、近づくな——』

そういった人々の恐怖や侮蔑、そして人間をみるような目ではない視線を送られて、桔梗は嫌がってでも異常を発揮し、『解答』し、周囲のことを理解していった。

だからこそ、桔梗はゆっくりと狂っていき、脳が狂っていくことを拒否し、それが反発しあい、逃げ出す事になった。

『現実逃避』——故に、彼女は全てから閉鎖的になり、すべての人間の言葉を『拒否』した。

目をつぶり、耳をつぶり、心を閉ざし、すべての扉を閉鎖し、何も認知されないようにし、社会的に認知されず、それこそ全てから透明な存在となっていた。そう、彼女は『透明になる方法』を解答したのだ。

桔梗はそれでよかったと思っているし、後悔もしていない。ただただ、夜、過去を思い出して、涙するだけなのだ。

後悔などしていない、過去を思い出し、よかったな、と思ってはいけるけれど、それは後悔ではない。

今以上の結果というものを見出せないから『こうしていればよかった』などと考えられないから。

だから涙を流して、心が締め付けられるようになって、——彼女は、これ以上の結果を見出せない。

だから『解答』できない。彼女は復帰するということとはできない。

彼女の前に彼がくるまでは。

委員会というものは、クラス全員が入らなければいけないと言うのがよくある決まり事だ。

桔梗がいる学校でも違いはない。

どうにせよ、桔梗はいつもどおりに、誰も入らなかった委員会に入り、そしてそこではそばそとやるのだ。

余ったのは——図書委員、限定された人数は1人以上4人以下とそれのみだった。

そして余ったそこに入り、透明人間のように扱われれば、それで終わり。

——だが、次にその場所に手をあげた少年は、少々違っていた。

白い髪、死んだような目、どこからみても異常。アフノーマル

そして次に手を上げたのは、白い包帯のようなものを巻いた少女。

それでもおかしい、というのに、委員会決めが終了したとき、手をあげた二人の内のひとりの、白い髪の少年が近づいてきて、手を差出してきた。

「よろしく、横溝桔梗さん」

「え…？」

思わず、その手をみて呆然とした。そして少年の顔を見る、死んだような目からはなんの意図も掴めなかった。透明人間のようになることに決めてからは、誰にも名前を覚えられなかった桔梗は、その少年が放った言葉だけでも驚いた。そして尚もその少年に差し出され続けている手をハツとしてとって、握ってくれたことに、言いようのない安堵が起こった。

その気持ちに、脳が驚きを起こし停止した。

後悔はなくても未練というものを知った。

少年が、少女にとって『絶対解答』という『アブノーマル』をぶち壊した、『解答不可能な白馬の王子様』となることは、桔梗でさえも知りえなかった。

## 『横溝桔梗』前編（後書き）

ええっと、この話での劣等感についての説明をちょっと考えると

他の人『なんであいつばかり』

桔梗『なんでみんな私のことをそんな目でみるの、私は欲しくてこんな力手に入れたわけじゃないのに、普通の生活がほしい、なんでみんなばかり幸せ…』って感じ？

検体名を考えてみよう！

『知識の泉』（横溝桔梗）

…自分に命名するからはまったくない。

ついでに正義の妹の志恩は異常アブノーマルではないです、普通です。

善吉に近いくらいの普通。『お兄ちゃんのために』を原動力とした普通な天才。

だれか異常アブノーマルを考えてくれるとうれしい。

異常：

『絶対的解答力』

『進化』

——ネタ切れだーッ

ついでに『透明になる方法』を回答したのに何故正義まさきくんは知ってるのー？という答えはカンタンです。

人が人をいらないものと判断するのは結局のところ感情的な部分で

す。例えば今から学生のひとは他のクラスを、社会人は他の部署の人を考えて下さい。そして名前は知らないけど、顔は知っている人を思い出してください。では、なぜ名前を知らないのでしょうか。一度だけあっただけだから？でも、同じ仕事をするかもしれないといったら名前くらい覚えておきますよね？覚ええない人は怠惰なだけです。…自分がそうですね、まあいいです。で、何故知らないのか？と聞くと、たぶん『必要ないから』『機会がないから』と答える、まあ機会っていうのは関係がほとんどないですから、はっきり言うてしまえば、『必要がないから』というものが深くいけば出てくるでしょう。ではなぜ必要がないと判断したか、『もしかしたらいっしょになるかもしれない』のに。結論はカンタンです。人の覚えるか覚えなにかの判断なんて、『効率』と感情を足し合わせたものなんだと思います。『必要がないかもしれない』のに、『めんどくさい』。それが答え…うーん、説明が苦しいなあ…

今回は他作品とともに三日後を予定

暇だったから高校生編予告

部活の部費が増える、そのことにより利益を見出した正義は自分の部活のために戦う事を決意した。

その、とある二人でくり付けあい、プールで競い合う協議のことだった。

「桔梗…知っているか」

「え、なに？」

「水には抵抗があるんだ。」

「いや、知ってるけど。」

「つまり——水の上を歩けば抵抗がないんだ。」

「え？え？ま、まさか——」

「水上歩行。」

「えええー!?!」

『お前らちゃんと泳げー!』

そんなツツコミが入ったが、正義まさきは全力でプールを駆け抜ける。

そんな物語を予定しようかと、思いもよらぬギャグ発生がします。

『横溝桔梗』後編（前書き）

死んだ目をした少年にしてみれば  
世界は『虚無』だった。

無機質な人形が動いている世界にしかみえない。  
だがその人形には『物語』がある。

全てが等感覚に『無』  
彼に敗北はない、どんなに強い敵を目の当たりにしようとも『進化  
する』

だから彼に努力も勝利も友情も  
ただ人形がつくりだした『人形劇』だ。  
だから彼に少年漫画のような世界は起こらない。  
同じように、人の言葉も無意味なのだから。

『幸せ』もない『不幸』もない、反対の意味をもつ言葉というもの  
も理解できない。それは覚えるだけの表であり、そこに反対という  
存在はない。

全てが無機質な『虚無』  
だからこそ、人を救うことには向いているのかもしれない。

『横溝桔梗』後編

ミンミンと蝉が鳴く。それは終わることがないように感じさせるけど、それは一週間の命。

ポツリと落ちてても人の世界観には、どうでもいいものとしかつつらない。

いや、それどころかうるさいと叫ばれることもある。

——彼らは、そこにあつたと証明したいだけなのかもしれない。

それを邪魔と叫ぶということは、命を無駄と叫んでいるということ

——わかったかな？

人間こそ残酷なんだ

ただ、人間の言う事全てが残酷なんだ

普通、普通、普通。

それを誰に壊されたかを深く深く詰め続けると、彼女のききよう前には、人間と言う言葉が降り立つ。

だからこそ、すべてから見られないように努力した。

——それは逃げているのだ

しかし桔梗にとって、その逃走はもっとも平和的であるものだ。殴られもしないし、罵倒されもしない。

兄が東大に落ちたとき、私が面白そうだからという理由で東大の問題をといたときの用紙をみつき、片目の視力がほとんどなくなるほどに殴られることもなにもない。

全て『答え』をだしてしまう、その力を呪ったことはいつでもあった。

だけど逃れられない現実がそこにある。

——お前は逃げてるだけだろ？

——逃げられない現実を強いているのは、お前が囲っている人間ではない

改心は永遠にない。

後悔なんて一ミリもないから。

でも、未練はあった。

虚無でしかない存在に、どんなに『答え』をだしても無意味だ。  
答えは0、永遠に0

その存在に答えはでない。

10を3で割続けるほどに無意味だ。

だが、桔梗ききょうは『知り』たかった。

この存在を。

答えはでてこない。

彼に数字でアンサーをつけるなら

『インフイニティー  
無限』と『ゼロ  
無』

彼の前では等感覚で0がおし並べられている。

そんな存在に答えをつけるなんて無意味の上に無駄だ。

「つまりよー、アイツを理解しようなんておもわねーほうが身のた  
めだぜ？」

「…」

名瀬さんから説明されたのは、彼という存在で、今までに分かった  
ことだった。

虚無、虚無、虚無。説明など不必要なくらいに、彼の存在というも  
のは何もなかった。

ただ、彼を突き動かすのは『救う』という思い。

どこで手に入れたかも分からない、心の中で杭のごとく突き刺さっている。

彼は、プリントを落としてばら蒔いた人をみつけければ、絶対に助ける。

かつあげされている人を見つければ絶対に助ける。  
借金がある人を見つければ絶対に助ける。

——助けるといっても、それは絶対的な意味ではない。

『可能性』を提示するのが『彼』なのだ。

彼自身がわかってやっているかはわからない。

だが彼は『助かりたい』と願うものしか手をださない。

故に彼は、手を伸ばせば取れるところに『救い』を置く。  
『助けて』といえばたしかに助ける、それが彼。

「ねえ…名瀬さん。」

「んー？」

「なんで、正義くんは、私に手を差し出したの？」

「…その答えはさー、たぶんでてると思うぜー。」

「…うん。」

小さく返事を、私はした。  
心が温かくなった。

そこに善意も悪意もない。

——だからこそ、温かくなった。

善意の中の悪意というものを心配せずに、心に受け止めたから。

私は…笑いたいんだ。

彼まさきという存在がいるだけで、心が温かくなる。  
裏表のない無が、いるだけで。

悪意マイナスをした少女は善意プラスを信じられないと叫ぶ。  
虚無ゼロはその少女に手を伸ばす。  
少女は——自らを知る。

だから聞く。  
少年に

「なんで——私に手をのばすの？」

少年は、ごまかさない。

そんなことはないと本心を隠さない。  
そのまま答える。

「悲しい顔が、迷惑なんだ。」

少女は優しく笑うんだ。

『横溝桔梗』後編（後書き）

どうもー！hackとISのクロスオーバー書いたり  
ギルガメッシュをひぐらしの世界観にぶちこんだり  
近未来のやつ想像して書いてみたり…暇人な作者です。

作者が考える過負荷は『世界観の投影』という感じです。  
だから、『正当防衛』という過負荷が現れた。

すべてが等感覚。せ、説明とか無理…なんでしょう…具体的な感覚  
はあるのですが、それを答えとだと無理ですね。桔梗さん！

## 番外編（前書き）

小学生のころのめだかと善吉の喋り方がわからなかったから  
善吉を僕にしといた。

あるえー？善吉が強くなったのって真黒の言葉が原因だったよねえ  
？

## 番外編

黒神<sup>くろかみ</sup>めだか、人吉<sup>ひとよし</sup>善吉<sup>ぜんきち</sup>。

——流導<sup>りゅうどう</sup>正義<sup>せいぎ</sup>の親友であつた人たち。

小学校にあがり、異変に気づいた。

——正義<sup>まよぎ</sup>が、いない。

転校したなら僕たちにいつてくるはずだ。おかしい、なにかがおかしい。

善吉もめだかも、両方ともそれには気づいていたようで、そわそわしながら話をする。

「めだかちゃん…僕、正義<sup>まよぎ</sup>の家<sup>うち</sup>にいつてくるよ。」

いても経つてもいられなくて、善吉は立ち上がる。それをみて、めだかも共に立ち上がる。

「私もいくぞ、善吉！」

「…うん！」

そうして二人は正義<sup>まよぎ</sup>の家<sup>うち</sup>にいった。家の前にきて、見回す。

「生活感がある。そして電気のメーターも動いている。——引越してはいない。もしくは冷蔵庫くらいの、起動を続けなければいけない家具があるということは断定した。その上で部屋の前の表札は流導から変更はない、新聞が大量にはさまっているようではない

し、家の前の植物は定期的に水をやっているようだ。引越しは絶対にない。遠出というケースも可能性が低い。」

めだかの推理を、黙って聞いている善吉——、小学校一年生の上がりたての少年に、理解しろというのが不可能な話だ。

理解できない自身が言っても意味はないと分かっているから善吉は黙っていた。

めだかはゆっくりとインターフォンを鳴らす。

ピンポンツという機械的な音が流れ、数秒経った後に声が流れ出す。

『はい？』

それは軽い声だった。——正義まことの母親の声。善吉はコクリと頷くと、めだかも頷き返す。

「——正義まことさんの友達ですが。」

『——っ』

善吉がそういった瞬間に、インターフォンから息を飲むような音が聞こえて、めだかは怪訝な顔をする。

善吉もかすかではあるが、おかしいことを感じていた。

『正義まことは死にました…』

「え！？」

「嘘だ。」

「ええっ!？」

『——ッ!？』

善吉は、正義まさきの母親に驚いたあと、めだかの即答に驚く。

正義まさきの母親が、インターフォン越しで息を飲んだことがわかった。

『本当よ？正義まさきは死んだの、死んだのよ？わかるわよね？』

善吉が聞いてもわかった、『こいつは焦っている』と。

めだかは表情を変えず——いや、さらに視線を冷たくして、言い放つ。

「では、『葬式はいつですか？』」

『——葬式？葬式ね、もうやっちゃたのよ、ごめんなさいね、もう

——』

「…それじゃあ線香をあげたいのですが——『家にあげていただけませんか？』」

その瞬間、善吉は理解した。『正義まさきの母親は敗北した』と

そもその理由こそ、それこそ

ボロボロの布切れのようなもので纏った嘘だった。

その上で最初の『嘘だ』の発言であせらせた上で追求して、ボロをださせた。

そう、『まんまと手のひらで躍らせた』のだ。

最初の一投で、『理由をつけて逃げていれば』もう追い詰められる



そういつて善吉は無理矢理にも手を引いて逃げ出した。

めだかは、ずっと正義まさきの家をにらみ続けていた。

——その後、この家は引越しになり、調べたくても調べられなくな  
ってしまった。

公園で、ハアハアと息が荒いのを整える。

めだかは茫然としながら、立っていた。

…ホロリと涙を流す。

めだかの涙を善吉が気づいた。

「泣かないでよ、めだかちゃん。」

自分も、涙をおさえきれなくなってしまう、そう善吉は心の中でポ  
ツリとつぶやく。

だけど、めだかは止められなかった。

「う…うわああああん、うわああああん。」

「お願い…だから、ぐすつ、なか…ひつくないでよ…っ」

善吉は、正義まさきとの約束があった。

——その約束をもつてしても、耐えきれないほどに、悲しかった。  
止まらない、涙。

とある公園に、二人の少年と少女の泣き声が響きわたった。

『なあ善吉、男が泣くなよ。』

『でも、かなしいんだよ…』

『そりゃーわかる、悲しくて泣いちゃったら、みんな悲しくなるだろう？』

『そう、だけど…』

『男が泣いていいのはな、大切なものと愛する者を助けられたときと――、大切なものを助けるくらい、つよくなれたと自信をもっていえるようになったらなんだよ、だから泣くな、善吉、約束だ。』

『やくそく？』

『ああっ！俺とお前の、男同士の約束だッ』

『…うんっ』

## 番外編（後書き）

原作の流れや過去についての会話などが流れれば、それを参考にしているといえたいなア…

正直母親の怒り狂うシーン、ヒステリックシーンが妙におかしいしね。

『香月四季』前編（前書き）

お風呂にはいつて、ちょっとだけ汗がじんわりとでてきたとき、小説の書き方で『これはいい！』っていうのができます。

風呂上がってパソコンに向かってみれば忘れているんですね…

明日こそは！って思って、またひらめいて、そして忘れて…

なにこの無限ループ

感想でアイディア、そしてネタなどをくれたひと、ありがとうございます。  
いました！早速——次回の人に使いました。

——もともとこんな物語はできていたりしましたが——フフフ…二  
つ名メーカーで『<sup>ダークヒーロー</sup>暗黒英雄』や『<sup>ヒロキラー</sup>英雄殺し』ってでてこないんだよね…

一人称が今までさっぱりなかったせいかな、少々文章が荒れている気がするのは私だけでしょうか？アドバイスを求めます！お願いします！

今回は前中後とわかれています。

## 『香月四季』前編

教室の隅っこに、少年がいた。

影が薄く、平凡——そう、どこにでもいそうな少年。

『草食系』『もやしっ子』——説明を求めれば簡潔的に言えばこう言えるだろう。

そんなどこにでもいる少年が——

——48人を病院送りにした者だとは、誰も予想できなかった。

ヒーローショー、日曜の朝にやる『戦隊もの』というものがある。

それをみて正義の味方というものに憧れたのは少なくはないだろう。

『かつき しき香月四季』という少年もその一人だった。

——だが、それは他とは違い、『正義が悪に勝つのはあたりまえ』という常識を容認できなかったのだが。

『なぜ、英雄<sup>ヒーロー</sup>が悪に絶対に勝たなければいけないの？』

そう大人に聞けば、困ったように頭を掻いてごまかすばかりだった。悪者にだって、努力という物語があり

悪者にだって、家族という絆があり

悪者にだって、生きようという努力があつたのだ

だけど、それを全てどうでもいいように語られるのが『正義は勝つ』

——その一言だった。

悪者に対し、その言葉は『悪には権利もなく、殺されても文句もいえない』そういう意味のように感じていた。

それは横暴でしかない、警察が悪者に対し、『悪だったから殺す』

といって銃を眉間に押し付け、引き金を引く——その動作が『正義は勝つ』、香月<sup>かつぎ</sup>四季<sup>しき</sup>にはそう感じられてならなかった。

——そして、この『普通<sup>ノーマル</sup>』であつた少年が『異常<sup>アブノーマル</sup>』を理解した。

『ヒーローごっこ』それは正義と悪に分けて遊ぶ『ごっこ遊び』というものだ。

ヒョロヒョロとした外見のとおり、いじめられっ子であつた香月<sup>かつぎ</sup>四季<sup>しき</sup>は、いつも悪人だった。

殴られ、蹴られ、いたがりながらも、ごっこ遊びだし『正義は勝つ』のが当然なんだし、と必死になつてガマンしてきた。

この日も、悪人になり、正義の英雄<sup>ヒーロー</sup>が殴る蹴るをしてくる。痛い、痛い——でも、アイツは今正義なんだから、しかたない——

そう思いながら必死に耐えてきた。

体がグラついて、倒れ込む。

英雄はジャングルジムの上にいた。必殺技の準備でもしているのだろう。

そして

その時——この『許容するために言い聞かせてきた』『言葉』が崩壊した。

『正義なんだから』その言葉がバキンツと破壊された。

——英雄にあったのは、下賤な笑み。

『優越感』それがそこにあった。

『正義は勝つ』？ならばあいつは正義なのか？

僕が倒れて、それをみて優越感に浸っているあいつが

おかしいだろ、おかしい、おかしいおかしいおかしいおかしいおかしいおかしいッ！

殴るのを嬉しそうにする英雄ヒーローがいていいものだろうか？いいや、違う。

間違っている。

この英雄ヒーローは——間違っている。

多くの人々に認められた英雄ヒーロー、その存在のおかしさに『香月四季かつきしき』は理解した。

正義の心をもった本当の英雄ヒーローと偽りの英雄ヒーローを『香月四季かつきしき』は理解した。

その瞬間、必殺技のためをしていた少年が吹き飛んだ。

そして、悪者であった少年の手には——『まるで無理やり引っこ抜かれたかのようなジャングルジム』があった。

冷たい目をして英雄<sup>ヒーロー</sup>であつた少年をみる。  
その周りを取り囲む少年たちをみる。

「痛かつたんだよ、痛かつたんだ、うん、とおつても痛かつたんだ。  
ねえ、みんな、優越感にひたつて英雄<sup>ヒーロー</sup>をやる人って、英雄<sup>ヒーロー</sup>なのかな  
？ 違うよね？」

ニヤリと、冷たい笑みを浮かべる。

「でも、それでもそれを英雄<sup>ヒーロー</sup>って呼ぶなら僕は――」

「<sup>ダークヒーロー</sup>暗黒英雄だ。」

## 『香月四季』前編（後書き）

【香月四季<sup>かつぎ しき</sup>】

性別：男性

検体名：『<sup>ダイクヒーロー</sup>暗黒英雄』

目の前のものの物質をどうにでもできる能力。

ただし触れられるものだけ。

ジャングルジムを『引っこ抜ける』し、『振り回せる』

机を『叩き折れる』し、それを武器にして振り回せる。

そういった能力です。はい。そのかわり『自身の力により』なので、

殴られたときに相手の腕を折るということはできません。

自発的にやらなければ無理――

うーんだれか説明の仕方を…

うむう…聞いてみたところ

『触れられる物質を如何様にでも利用できる能力』ということになった。うん、おにーさん意味不明ですよ…

できない自分がいつてもなんですが…

『物質に触れて干渉』し、『物質をどうにでもできる』

持ち上げれる、叩き折れる、ねじって螺旋状にできる――

電気信号をだして無理やり跪かせたり、脳波を感じ取ったり、鉄球溶かしたり、攻撃貫通したりする能力があるんだから、いいよね？

あ、ついでに作者は知り合いすべてから『隠れたDS』っていう称号をいただきました。

――文章をみてください、DSだと思いませんよね？というかSとかMに人はわかれるっていうけど、最終的に『人類皆変態』って言うてる気がします。

『香月四季』後編（前書き）

はつきり言つと、自分の書きたかったものが書けません。  
いや、思い出せません。

おそろしや、月日が過ぎることはおそろしや  
文章が荒れてるし、何コレ本当にだめだ。

もとの文とここが違うよ！ってのがあつたらどうぞガラスのハ  
ートを打ち砕いてください。

## 『香月四季』後編

正義と悪

そんな簡単に割り振られる

人は悪を侮蔑し蔑む

…自分を正義だとしても勘違いしているのだろうか

そういえば、人はたいていこう答える

『自分にも悪いところがある』

——それがひどく不快で仕方がない

正義と悪という立場の中なら、正義という立場にいるであろう自身でさえも悪という場所があるというのに、悪という立場にある人を悪だと決めつけるのに

悪を悪とだけみる、その視線に、人という内側を視ずに蔑むその視線に

人は、ひどく自分を正しく見せたがる

…人は、ひどく正しくない

——正義

その言葉を考えれば彼は理解できない。

傲慢な正義を裁く、などという言葉をつくが、それが傲慢だと、理解していた。

——だからこそ、やめようと思ったこともある

しかし、それは四季<sup>しき</sup>にとって無理難題といえることだった。傲慢な正義を嫌悪するということは、傲慢な正義が嫌でも目についてしまう。

P T Aの子供、家で優等生としてふるまう……そんな子供が人をいじめ、そして最後のセリフはこれだった。「俺とお前、どちらを信じると思う？」答えは容易だった、立場的にも強い、優等生として名が知れているその子供のことを信じるだろう。

——だったらそのいじめられている子供は誰が救うんだ？

傲慢かもしれない、だけど誰が救うんだろうか

誰の味方もない、ちっぽけな存在に

終わった後に大人たちに言われた言葉がある

——なぜこんなことをやったんだ？やりすぎだ

——大人を頼ればよかったのに

——大人ならちゃんと解決できたのに

改心などありえない。

…そんな言葉を吐く大人を誰がしんじられるというのだろうか  
誰も気づきさえもしなかったというのに

夕焼けの空、幻想的な世界を教室内で作り出されていた。  
そこにいるのはひよろひよろとした少年だった。

——ただ見出したかった  
見つけた真っ白な少年に、  
平然と人を助ける少年に  
転んだ人がいれば、手当をする  
物を落とせば拾ってくれる

そんな当たり前のことだが、やれる人はいない、そんな少年のことを  
褒められている時に目をみればたいていのことはわかる  
『悦楽』『快樂』『蔑み』『多種多様な感情があり、それを感じ取れる

——だが彼は虚無<sup>ゼロ</sup>だった。  
何にも感じられない、それどころか何も理解できない

顔を上げれば目の前に彼がいる、『流導正義<sup>じゅうどうせいぎ</sup>』  
その存在をみて、からっぽだと表現してが、間違いだとか香月四季<sup>かづきしき</sup>は  
理解した。  
何もない、虚無<sup>ゼロ</sup>だった。

震える声で問う――

「お前は、なんで人を助けるんだ？正義の心をもってとか、そういうことを考えているのか？」

「無意味」

…言葉の理解ができなかった。

それを相手は理解したのだろう、再度…正義は口を開く。

「正義、悪、それは無意味。人はそんなものを考えて行動しない、自分の信念から起こり、そして行動する、それだけ。」

「…ッ」

善意も、悪意も、無い。

正義も悪にも染まらない答えがそこにあった。

短い言葉

平坦な口調

――だからこそ、香月四季は知った。

自分の信じていたものがそこにあった。

正義という言葉にとらわれず、悪だということにもとらわれず。  
ただ自分の信じたことを貫き通すという強いものがそこにあった。

ポタポタと頬を流れる涙を感じ取る  
自然に流した涙だった。

「帰っても」

虚無少年なにもないにとつてはいる必要がないから帰っていいかという言葉だ  
ったのだろう

だがそれが彼しきにとつては優しさのように感じられる

「ああっ…！」

涙が止まらない、前をみればすでに正義まさきはいない。  
だからこそ、何もかも開放する。

「うあっえぐつつわあああああああっ」

——正義ただしいことなんだと言い聞かせて保ってきた少年は虚無ぜろに出会っ  
た。

ただ少年は理解した  
正義ただしいことじゃなくても悪わるいことじゃなくても  
そこに信念があれば、よかったことを

何分たっただろうか  
いや、何十分かもしれない  
何時間かもしれない

時計をみれば10分程度しかたっていないことに苦笑をする。  
涙はもう流れない  
残った涙を拭い去った少年の顔はすがすがしいものだった。

自然と笑顔になる  
体が軽い

「行く…か」

自分の道を、少年は歩き出した。

『香月四季』後編（後書き）

言いたかったのは

正義を裁くことを傲慢だと思って苦しんでいる少年に

そこに正義も悪もなく、信念をもって進めば、そういった傲慢だとかは関係ないんだってことをいいただけなんですよ。

で、次の異常アフノーマルですが、過負荷にしようと思います。

で、たくさんの方々から色々なネタをいただき、そこから見出してみたんですが

やはり多いのは精神的なものですね、思考や精神…それを感じさせなかったり、と…

そこから考えて、やはり精神的なものを感まじさせないものは過負荷だよな、と考えたのですが、ちょっと正義まさきには絡ませられない…

ということを考えてた結果、

感情を貯蓄するというのはどうかな？と考えたんですよ

人の罪悪感やら快楽やらを貯蓄させる、そしてそれをいつきに引き出し人を壊す。

…どうですかね？

閑話（志恩のヤンデレ化Lv1な話）（前書き）

ただのおふざけです。

「ねえねえヤンデレの書き方を教えてよ」

「依存したものにたいする外人が『It's so crazy!』  
って叫んじゃう感じで書けよ」

「…なんで外人？」

こんな会話からおかしいかんじをだせと言われても…ヤンデレの書き方がわからない。

それにしても今週のジャンプをみると球磨川がっこいい。  
なにこれがっこいい。

球磨川敗北

←

球磨川『やれやれ見破られちゃったなーもー』

そんなとき善吉登場。

善吉「だったら俺がやるぜ！」

球磨川『僕の代わりに裸エプロンに——「断るっ！」ちえっ  
みたいな会話がされると思ってた。

## 閑話（志恩のヤンデレ化Lv1な話）

——風が、舞う。

春の息吹が再びやってくるのを感じる。

孤児院の中で、その兄妹はサクラの中佇んでいた。

妹の髪色が普通の色だというのに、兄の髪色は真っ白で、恐ろしいくらいに浮いている。

瞳は暗く、そして何もない。

暗闇すらない、光すらない、何を映し出しているのかさっぱりわからない。

視ればまるで宇宙に吸い込まれるような、そんな瞳をもつ少年と、笑顔でその兄である少年の手を握っている妹。

——たいていの人々は、少年をみれば恐怖を感じた。

知らない場所の恐怖、わからない場所の恐怖、おそらくそれと同じものだろう。

わからないのだ、目の前にいる少年のことが。

だがそんな人々も、たいていの人々が最終的に普通に接している。

何故か、それはわからないけれど、わかるからだった。

この少年について、誰も<sup>おかしな少年について</sup>が理解できない、何もない場所に何かがあることを前提に理解しようとしても何も理解できないのと同じだ。

ないのに理解しようとする、そして結局は理解できない——<sup>まさか</sup>だけど、彼をみていた、ただ一つわかった。

この子は、悪い子じゃないということだった。

何もないというのに、よい子悪い子というものはない、だが、正義<sup>まさき</sup>

と接すれば、何故かこころの圧迫が無くなっていく。  
もっていた警戒が切れるのだ。

——そして理解するのだ。

——そもそも横にいる妹こそ危険なのだと（女性にとって

「お兄ちゃんお兄ちゃんお兄ちゃんお兄ちゃんお兄ちゃん」

「……？」

「大好き♪」

「そうだな。」

よくもわからず、この場は少しぐらい返したほうがいいと脳が判断し、小さく返す。

人間関係の円滑な進め方というのは、少しの信念とちゃんとした返答だ、人に返そうとしている信念を感じさせ、なおかつちゃんと返す、それを完璧にしようと思った結果、こういう返答がなされた。

——普通ならほのぼのとした光景だ。

だが後ろの孤児院で、職場の大人の人々やませた子供、そして中学生高校生といった面々は顔を引きつっていた。

「お兄ちゃんお兄ちゃんお兄ちゃんお兄ちゃんお兄ちゃんお兄ちゃん」

「……？」

「大好き♪」

「そうだな。」

……そう、なんとこの会話が続けられたかわからない。

朝から——今はもうすぐ夕方だ。

さすがに入らないか、と提案するものすごい形相で妹がしおんにらんでくるので手が出しにくいのだ。

そもそもこの光景が『珍しくない』こと自体おかしいのだ。

兄が、別に妹に好感があるか、と考えれば、何も映し出さない瞳をみても好感をもっているとは思えない。

そして日常をみると、アフノーマル異常だ。

そもそも職員がやることを考えてみると、おかしい、彼らがやることは

週に一度『盗撮道具』やら『盗聴用マイク』などを兄の部屋から探まさきし出すことになっている。

犯人は——わかりきっている、が……完璧に証拠を残さない。

「お兄ちゃんお兄ちゃんお兄ちゃんお兄ちゃんお兄ちゃんお兄ちゃん」

「…？」

「大好き♪」

「そうだな。」

回数がさらに追加された行為をみて、職員たちはため息をつく。

——この兄妹はおかしい、兄も妹もおかしい

「お兄ちゃんお兄ちゃんお兄ちゃんお兄ちゃんお兄ちゃん」

「…？」

「大好き♪」

「そうだな。」

——どうすればいいんだ…  
そう職員はため息をつくしかなかった。

「そういえばお兄ちゃん、新しく知り合いが増えたらしいね？女？」

「…そうだな。」

「また増えたの…お名前は？」

「古賀<sup>こが</sup>いたみ」

「…脅迫<sup>しょうかい</sup>させてね」

「…？ああ」

## 閑話（志恩のヤンデレ化Lv1な話）（後書き）

さらなる番外編。

もう書き方とかどうでもいいやといった感じで話を創ってみる。

「  
…」

香月四季、彼は迷っていた。

見ているのは自分の貧相な肉体、もやしだ、ああもやしさ。

暗黒英雄などという名前が誰につけられたかもわからないがついて  
いる。

なのに肉体が貧相なのはどうな

のだろうか

そう思って、相談のために流導正義りゅうどうせいぎにあってみる。

——理由は率直にいつてくれるからだ

「どうしたほうがいいと思う？」

「鍛えれば」

「わかった！」

- e n d

高校になったらアンノウンもちのあの生徒会長並みの筋肉マッチョ  
になっている伏線。

——いらない気がする。

『月下綾芽』前篇（前書き）

中学時代最後の話

名前は月下綾芽

これが終わったら、人物紹介とともに本編突入。

この手の話を書くとき恐ろしく嫌になってきますねーアッハッハWWWW

## 『月下綾芽』前篇

暗い暗い世界に、鈍い音が鳴り響く

その音はなんだろうか、聞いてみれば、それは殴る音だった。

永遠に流れるかのように、止まらないその音は、殴り続ける女性の  
嗚咽と、殴られる少女の涙とともに繰り返される。

少女は、女性の――いわば強姦、無理やりに汚され、生まされたもの  
だった。

女性は一人の命を捨てる罪悪感にのまれ、自ら産むことを決意する。

――それは、感動の物語かもしれない

経緯はどうあれ、がんばって立っていこうと女性が立ち上がったのだ  
産まれた少女は、愛しいと感じられたのだ

だが、それは何もわかっていな人々からの言葉だ。

女性はボロボロになるしかなかった、親からの絶縁、そして子育て、

人々の悪意のまなざし、自身が悪いんじゃない、ただただ叫びたくても叫んだら自分が悪者にされるであらうまなざしに、女性はただ耐え続け——壊れた。

スイッチがはいったのはいつだろう

少女が幼稚園へと入り、酒に酔いながらも、辛い辛い時間を忘れようとしていた。

辛くて辛くて我慢して我慢して、罅が入っていたのかもしれない。  
少女の髪の色が見える、

——自分と同じ髪色ではなかった

壊れかけていた女性は、そこで——壊れた。

何もかもがガラガラと崩れていく、恐怖、憎しみ、怒り、グツグツと煮えたぎりながらも、吹き零れなかったその鍋は、押しとどめようとしていた理性の蓋を押し分け、噴き出した。

叫び声が起こる

それは恐怖の叫び声、フラッシュバック、強烈なストレスにより脳に刻まれた過去が、再度鮮明に浮かび上がってくる現象。

そう、過去の、それにより思い出された記憶が誰もが予想できるところだろう。

倒さなければ、殺さなければ、そんな恐怖をもって、立ち上がる。

少女は何も知らずに、やつれながらも近づいてくる優しい母を見て——笑った。

——そして殴られた

何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も

痛い、怖い、どうして、どうしちゃったのお母さん、そんな思考が何度も浮かび上がる、だが少女はどうしても目の前にいる殴る女性、自分の母を憎むことはできなかった

痛い、でも、それでもそんなにおびえた母をみた少女はただただ罪悪感を感じる。

何故？私が悪いの？

何故？ああ、私が悪いのか

何故？私がお母さんをしたのだろう

何故？優しいお母さんが理由もなしにそんなことをするわけがない

何故？でも、理由がわからない

何故？…ああそうか…私がいるのが悪いのか

罪悪感、自分に対する罪悪感、それは全くの無実だというのに、それを少女は抱え上げる。

だからお母さんは悪くない、それは愛ゆえの行動だった。

だけど怖かった、目の前の自分を殴り続ける存在が

それも罪だと少女は勘違いをする、そう勘違いだ。

だがそれは幼い少女は気づかない、自分が悪くないとも考えない。

自分が悪いというのに、自分が殴られているのに怖いと感じる、それはおかしいと考える。

だから少女はカチリと何かスイッチがはいったのを感じた。

——何も怖くはない

目の前の殴られているという事実を感じた。

母親の、うつすらと見えていた罪悪感を消し去る、少女は自分が悪いと勘違いしているからこそその行動過激になっていくその行動

——ごめんなさい、お母さん

笑顔でそう答えればピタリと拳が止まった。

そして目の前の光景に啞然とする。

ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい

そう自分の子である少女が、血を流しながら謝り続ける、そして自分の拳には血がついている。

少女は目をつぶる、疲れ切ったような顔で、クタツと倒れこむ

それが死んだようで、一層怖さを感じる。

——少女が気絶したことで、少女が発言した異常が途切れた。  
アブノーマル

そして母親である彼女は、自らが感じていた罪悪感をすべて受け取った。

「あ……」

声にできない叫び、一瞬のことでもなにかもが真っ白になった。

「うわあああああつあああああ」

——母親は叫び続け——次の朝、少女はひとりぼっちになっていた。  
起き上がった少女は、いない母親を探し回り、そしてまたも勘違い  
するのだ。

——私のせいでお母さんはいなくなったんだ

そう思い込み、ただただ償わねばと、少女は壊れていった。

—— 赤茶の毛をした少女が、いた。

ショートカットで、見た目は活発な少女、陸上部所属で成績も優秀。だがそれは償いだった、自分がしたことを誰に償っていいかわからなかったから、とにかく努力した結果だった。

少女は自分の異常にも気づいていた、常に最悪の結果をもたらす感情を『貯蓄する』能力だと、少女は数年で気づいていた。

貯蓄し、そしてため続けたものを返し、人を壊す。

だからこそ、自分の罪を償わねばと必死になっていく。

『つきした あやめ  
月下綾芽』

ただ少女は人を狂わせる自分を償おうとして、そして人の眼にとまり、そしてさらに罪を増やしていると考え壊れていく。  
だが心動綾芽<sup>しんどうあやめ</sup>は目の前の存在に呆然とする。

——心がない

その目にはなにもうつしださず、狂わせる最悪のものが何一つない最悪がそれだと言わんばかりに、その存在はあった。

「……よろしく。」

中学三年、普通の中学生なら受験を考える年だろうか  
——そんなことを考えられなくなるほどの存在と、彼女<sup>あやめ</sup>は出会った。

## 『月下綾芽』前篇（後書き）

### 【月下綾芽】

性別：女

検体名：禁色幽閉  
ブラッディネオテニ

最悪の結果を残す感情を蓄積させ、途中で返すことによりさらに最悪の結果を作り出す。

たとえば、『自殺したい』といったもの、やっぱり死が怖いから耐えられるけど、それをさらに超える欲望を解放させれば結果的に相手は自殺する。

ついでに検体名は綾芽という文字だけ絶対にのこして、ひたすらに思いついた文字を入れてたらこんなものができた。

禁色幽閉…なんかあつてるなあなんて思ったんだけど…いいかなこれ？

『月下綾芽』後編（前書き）

…自分でもこの物語でなにをしたかったんだろうか

アイリスを当て字して綾芽というか  
綾芽の花がアイリスというか

『月下綾芽』後編

——昔、ありの巣を水没させたことがある人は何人いるだろうか

——昔、虫を簡単に殺したことがある人は何人いるだろうか

『純粹』

子供だから仕方がない、だがそれはたくさんの命を散らせているのだからといって罪は消えない、人は容易くそれ以外を傷つけている。

そして

——人はそれをすぐに忘れる。

罪を忘れ、栄光にすぎる。

人は、ひどく愚かだ

そして罪を永遠に抱え続けるものもいる

全てが悪いと思いつけるものがある

人は傷つけていなくとも、傷つけているのではないかと抱え込み罪を抱え、罪に絶望する。

人は、ひどく…愚かだ

『つきした あやめ  
月下綾芽』

袋小路に追い込まれた罪なき罪人、罪を償わなければいけないと、そう嘆き続けて行動すれば罪悪感を増やしてしまう罪なき罪人。

何故こうなってしまったのだろう

何故こんなことになっているのだろう

そう考えて、心がひび割れていく、その心はすでに、まるでトランプタワーのように……少しの衝撃があればガラガラと崩れていくだろう。

だからこそ、願った

だからこそ、望んだ。

——だれか、私を助けて

救いの手を

だが、手は差し伸べられない

それでも時はまわりゆく。

ならばと、他人を幸福にすれば償えるのかと思い、ならば結果を残せば償えると考え、あがき続ければ人が集まる。

集まるのは賞賛の声

集まるのは期待の声

集まるのは妬みの声  
集まるのは憎悪の声

そつ、集まったのだ、アフノーマル過負荷の恰好の標的が

——そしていつも通りに彼らの心を貯蓄し、落とす。

あやめ彼女の心を関係なく。

そして、罪を増やす…

——だれも、近寄らないで。

そして、人を拒否する。近づかなければ、この過負荷で罪が増える  
ことはない。

それは矛盾、助けてほしいというのに、助けようとしても、近づいては罪が重くなる。

そんな矛盾に罪悪感を感じ、罪なき罪をさらに重ねる。

悪気はなかったんだ、その言葉を発しても、助けるものは少ない、それは実害があるからだろう。

ならば、そうなってしまう少女はどうなのだろう、悪気はないやる気もない、ただ償いたいけど、罪を重ねてしまう、ただ、起こってしまう。

——きっと誰も助けはくれない

普通ならば

普通ならば

だって、感情で崩壊してしまうもの。

——ならば虚無かんじょうがないならどうだろう

目の前の存在に彼女あやめは心奪アブノーマルわれる。

感情のない、自分の異常さであつても何も左右されない、そんな人間。

それは彼女自身にある、罪を重ねない、唯一の人間だった。

「あ……あああ……」

自分の罪が許されているような、そんな気分。やっと、許されるような、そんな気分。

そんな気分についてのか涙がでてきていた。

罪が、増えない、そんな人だった。

許されない、許されるどころか罪が重くなる自分、それが今変わりゆくことを感じる。

——私は、許されてもいいのかもしれない

そのことを知った彼女は彼の手を取った。

「たすけて、くれる？」

それは、罪を償わしてくれるか、という言葉と同じであり、支えてくれるかという言葉と同じだった。

ただの一言、そういった瞬間に彼は頷いた。  
答えは単純だった。

「…辛そうな顔が邪魔なんだ。」

その言葉に、罪の意識を感じなかった彼女はただ、ニッコリと笑った。

償うための元気づけのための嘘の笑顔じゃない  
本心の、笑顔だった。

「…あ、そういえば綾芽さん？」

桔梗が綾芽へと言葉をかける。

そんな桔梗に、ビクリと綾芽はおびえる。

「…大丈夫だよ、私は影響を受けないための『解答』したから。」

その言葉に、綾芽はわけがわからなかったが、桔梗はニコリと笑う。影響を受けてない、そのことがわかり、驚きながらも綾芽は安堵する。

桔梗がやったことは、あくまで、影響をうけない『程度』にしか過ぎない、無効化したりする類ではない、ただたんに、彼女が知る、正義のように、一時的に思考を停止して、必要な言葉を発するため脳を動かす程度でしかないのだから。

「綾芽ってさ、アイリスを当て字するとそう書くんだって。」

「…？」

「アイリスの花言葉はね——」

——その言葉を聞いたとき、綾芽はポロリと涙を流した。  
自分がいたから、などと考えていた彼女にとって、それは救いだっ  
たのだろう。

……いや、救いではない、ただ気づいただけだった。  
自分は愛されたいのだと

『あなたを大切にします』

## アイリスの花言葉

そんな意味のある名前を——嫌いな相手につけるだろうか  
それは、違う。

たとえ、愛する人とできた子供でも、汚されてできた子供でも  
綾芽の母は、大切に愛したいと願ったのだろう。

『月下綾芽』後編（後書き）

…おかしいなあ

物語がまともにできないぞ！

花言葉無理やりだけど、私は全く後悔してない、もう間違ってもいい！

そっぴや、最終的な紹介をしようと思うんだけど、イメージがちゃんとできやすいように絵とか描いたほうがいい？

下手さを無理やり隠すために、寝起きで書くけど…

うーん、なんか小説の登場人物紹介っぽくやりたいんだよね！

・高校編・『プロローグ』（前書き）

うん、ぶっちゃけると文章たまに兄さんに任せてるんだ。

特に最初のころの『横溝桔梗』部分とか

それで自分は流れを教えるだけなんだ

たまに自分がやったり兄さんがやったりと色々やっただけで文章が色々とブレてると思うけど、気にしないでね。

## ・高校編・『プロローグ』

「正義くん、これきてたよ？」

「ありがとう」

孤児院の先生が、正義に一枚の封筒を渡す、書いてあるのは『箱庭学園』からの便りだということだ。

「お兄ちゃんどうしたの？」

歩いていくる妹をちらりと正義はみたあと、封筒を掴む。

——封筒が切れた。

香月四季の異常だ。

ハラリと落ちた封筒の切れ端を志恩が取り、正義はゆっくりと中身を見る。

そこには数通の書類があった。

まず一つ目に推薦証、そして色々な学園についての資料、そして試験日程。

推薦の欄を正義は見る、そこに書いてあったのは学費無料などといった破格の提示内容。  
そして最後に

・待遇は試験結果をもとに上下する

とだけ書いてあった。

それをみて、紙を折りたたむ。

——利益を考える人間に、これ以上の利益を提示する高校はないだろう。

故に流導正義りゅうどうせいぎの選択肢はこれ一択のみとなったのだ。

「…箱庭、学園？」

横溝桔梗はその封筒の中身を広げて、紙を隅々とみていく。

「推薦、学費免除、試験…試験ってなにをやるんだらう？」

考えを巡らせていき——『解答』する。

「…いこう、正義君たちもいくだろうし…」

目を閉じる、まぶたの裏に浮かぶのは自分を受け入れてくれた仲間たち

小さく、小さくうなずく、そして少しばかりの涙を流した。

幸せだ――

ああ幸せだ

だから、手放したくないと思うのは、いけないことですか

たとえ他人を理由にしたとしても、ずっと、いっしょにいたい。  
そんなことを思える仲間がいる、ただそのことだけに桔梗は歡喜した。

「これは正義絶対に来るだろうな。」

すでに出会って二年程度だろうか、それである程度の正義の行動は理解していた。

そして香月四季は思い出す、過去の自分を

「…さて、受けるか。」

過去の自分を思い出して——すぐにやめる、振り返らない。  
過去の教訓を生かすことはできるかもしれない、だが信念は今にある。

過去により形作られた信念は、現在の心の中にあった。

「…箱庭学園？」

封筒をはさみで切る、古びたアパート、母の親である自分の祖父、祖母からによる支援で現在生活が成り立っている『月下綾芽』は、母と一緒に住んでいたアパートで暮らしていた。

その時にきた一通の封筒、祖父や祖母などの手紙は来たことがない、貯金通帳にお金が入れられているだけだ。

貯金通帳にお金が入っているのを気づいたのはいつだっただろうか、

母の子供から使っていたという貯金通帳がいつのまにか、部屋に差し込まれていたときも驚いたが、その時にも驚いた。

——正義まひきさんに会ってから気づいた、これは罪悪感からくるものだ  
けども思っていたけれど、これは愛からくるものだ、理解した。

「推薦…」

学費が、無料に。

これ以上も、つくかもしれない。

そのことを知って、ゆつくりとほかの資料を読み始め——

「アハハッ」

思わず笑ってしまった。

——まさしく、正義まひきくんが好きそうなものだ。

「——じゃあ、いこう。」

支えてもらっているだけじゃだめだ、支えあわなきゃ。

そう思ってたまるで夫婦だと思わず笑ってしまった。

頷く、携帯が震えるのを感じる、開けば——見知った人たちだった

——いいよね、幸せでも

なぜ ようか  
名瀬天歌  
こが  
古賀いたみ

二人の少女は封筒の中身を見る。

その後、何故か名瀬天歌は笑い始めていた。

「ど、どうしたの！？名瀬ちゃん！？」

「いやさー、ちょっと調べただけだよー」

笑いながら古賀いたみの心配した言葉に返答する。

「おもしろくなりそうだぜ？」

そういつて紙を軽くだたいて、笑う、そんな彼女に古賀いたみは笑い返した。

「…うんっ」

・高校編・『プロローグ』（後書き）

…さてっ！

単行本買ってこなきゃ！

流動正義を他作品へ  
まどマギ

暗黒英雄↓魔女にタージチ！↓破裂↓勝利

ネギま！

アスナ魔法レジスト能力を得ます

ネギの才能その他もろもろを受け継ぎます

このかの魔力を適合させます

中国拳法娘の能力をコピーします

忍者も銃使いも神鳴流も…結局誰も勝てない

ゼロの使い魔

虚無ドーンッ

真剣で私の恋しなさい

結局誰も勝てない

…あれ、おそろしくつまらない

## 登場人物設定・高校入学直前・（前書き）

次回は安心院さんとの出会いとです

アクセス数9万越え

現在約99500

おそらくこれが投稿されて二時間後くらいに10万越えしてる。

ありがとう！

なんて言うか、今の気持ちは…

…

…

ありがとう！

## 登場人物設定 - 高校入学直前 -

### 【名前】

りゅうでい まなき  
流導正義

### 【性別】

男

### 【年齢】

15

### 【身長】

164?

### 【容姿】

白髪死んだ目、整った容姿

可愛いほづの容姿

髪形は無造作な感じ

### 【性格】

空気読めない・感情なし

人は無意識のレベルで助けることが決まっている。

アブノーマル

### 【異常】

ジ・レヴオルション  
『進化』

他人の能力を経験値に変えて蓄積し続ける能力。問答無用で脳から  
コピー  
複写

故に他人の異常や過負荷なども問答無用で経験値にし、使えるよう

にする。

ゲームでたとえるなら

・スキル全開

・ だけど全部最初はLv0だから人と出会って使えるようにならない。  
なければならない。

無効脛で無効化可能  
ライフゼロ

だけどやっぱりとある彼女の能力を使うと、  
無効脛は完全ライフゼロに無効化  
して本当に問答無用に複写コピーする。

【過負荷】  
アブノーマル

『正当防衛』  
セルフ・ディフェンス

自分が受けたものをすべて相手に返す。異常とか過負荷とかそういうものは完璧に無効化、だって『正当』な防衛ですもの。

見て見ぬふり、途中参加でも同等とみなし、すべて返す。  
ライフゼロ

無効脛無効化、不慮エンカウンターの事故無効化

大嘘憑き（オールフィクション）でも無かったことにできないのが特徴、

もう一度いうけど、だって『正当』ですもの。

そのかわり大嘘憑きで消したときのみ、大嘘憑きで打消し可能  
無かったことは無かったことに

【名前】  
流導 志恩  
りゅうどう しおん

【性別】  
女

【身長】  
133?

【容姿】  
茶髪・長髪・ポニーテール  
目が丸く大きく、その容姿を引き立てて、さらに可愛い容姿

【性格】  
手段は選ばない、必ず成功させるタイプ  
元気な性格だが兄依存というか兄へ愛という名の欲望の塊

【異常】  
アブノーマル  
なし、基本的に全能よりの『スペシャル』

【過負荷】  
アブノーマル  
なし

【名前】  
よこみぞききょう  
横溝桔梗

【性別】  
女

【身長】  
158?

【容姿】  
黒髪・長髪・カチューシャ・伊達メガネは捨てました。  
可愛いよりの容姿ながらも、綺麗さが見える。

【性格】  
純情に近いためか依存しやすい。  
心は強いが、傷つきやすい、だが決めたことはやり遂げる。  
だけど、大体相手のほうをみて解答しなければ話もできない（流導・  
香月・月下以外）

アブノーマル  
【異常】  
アブノリユートアンサー  
『絶対解答』

すべての物事に結論を付けることが可能。  
だが、基本的には自身がもつ経験により解答を成している。  
基本的に言えば、『瞬間記憶能力』によってできあがった知識を異  
常によって整理し、解答する、が、瞬間記憶能力の能力者であった  
としても解答できないレベルのちいさな、微生物などの発見でさえ  
も可能。

兄の大学問題を解けたのは、兄が解いているところをずっとみてい

たから。

【アフノーマル過負荷】

なし

【名前】

かつき香月 しき四季

【性別】

男

【身長】

182?

【容姿】

何故か筋肉ムキムキになったマッチョマン、どうしてこうなった  
髪形はオールバック・髪色は灰色  
顔はゴツイ上ににらむと狂気だ

【性格】

で、ムキムキになったあとに、自分の異常を思い出して、ここまで  
アフノーマル

ムキムキになる必要はなかったじゃないかと思いついたが、怠けるわけにもいかず筋トレし続けている。  
性格は苦勞人、けどどこかしらズレている。

アブノーマル

【異常】

『全ては掌の中』  
シージングハンド

触っているものをその姿存在すべていたるまで掌握する。

やろうと思えば触れた瞬間に相手を破裂させることができる上に、鉄を掴めば剣にできる。

掴まれれば終了、ハッキリ言っただけなら触れられなければまだ大丈夫、だということ以外たちの悪い。

アブノーマル

都城といった異常の使い手がいたが、基本的に自分の能力を使って自分を動かせれば完全無効化可能といったふざけているんじゃないかといった最強さ。

アブノーマル

【過負荷】

なし

【名前】

つきしたあやめ  
月下綾芽

【性別】

女

【身長】

161?

【容姿】

オレンジ色の髪・ショートカット・リボンによってある程度くっ  
ている状態

笑顔がかわいい顔で、ちょっと釣り目気味、キリツとしている。

【性格】

元気が良さげな表と違って、本来は暗い性格。

自分のせいだと考えてしまうからこそマイナスとは違う。

だが、『完全に正反対』だからこそ同じマイナスといえる。

アブノーマル

【異常】

なし

アブノーマル

【過負荷】

ブラッディネオテニ  
『禁色幽閉』

相手の『最悪の結果を残す』感情を貯蓄させることができる。

貯蓄するならまだいいものの、貯蓄したものをまるでダムが決壊し  
たごとく返し、精神を崩壊させることができる。もちろん自分の心  
でさえも貯蓄できる。

崩壊させるのは無意識になるが、意識的に操作もできる。

だがOFFにすることは不可能、エンジン&ブレーキをきれない走  
り出した車がごとく走り続ける。

## 登場人物設定・高校入学直前・（後書き）

ネーミングセンスをください。

ジ・パラドックス  
『完全進化』

絵をかいてみました。登場人物の

…兄に頼んで

どうせなら色つけてやるよ、影も（笑）などと、ニ。ニ。によく動  
画をアップロードしていた兄は、調子に乗って丸一日かけて色を付  
けます。

画像的には最初に流導が一番前で、右手に抱きつくように妹、月下  
と横溝は流導の左右に、そして香月は肉体美を強調するようなポー  
ズをとって、色塗った後に説明などをキャラに合わせて色塗り

OKやつふー！最高の出来栄だZE

↓その時電子レンジと食器洗い機給湯器が合わさりブレーカーダウン  
兄発狂、泣きながらコンビニへ

落ち着いてから帰ってきて、とりあえずファントとじゃがりこ片手  
に起動

←

保存してない!!データ消滅

兄「…よし、勉強するか！」↑現実逃避

## 番外編みたいなもの（前書き）

ええなんていうか、はい、安心院さんとの出会いを書いた後に聞きたいことがあったために兄に書いてもらいました。

理由は、『聞くだけじゃなんだかダメな気がする』というあいまいさですが、仕方ないといいながら書いてくれました。

どっちにしろおまけみたいなものですから、あまり考えて打ってませんので、五分程度で作ってました、だから誤字脱字があればいつてくれるとうれしいそうです。

できれば、答えてくださるとうれしいです。

最後に聞いてみようかと思えます…

## 番外編みたいなもの

ガタンゴトンと電車が揺れる外の景色を見ながら、いゅうてつまなき流導正義は、ふと見知った既視感デジャヴというものを感ずる。

——それは試験終了後の話だった。

——時はさかのぼり幼稚園時代

「動物園に行くぞ！」

そう黒髪の少女、『黒神くろかみめだか』はそう宣言した。何を隠そう、この少女は遠足で動物園に行ったときに”一体も”動物に合えないという動物園の意味を抹消したほどの少女だった。

「——い、いや別にいいけど。」

そんな少女の、今度こそはという張り切りように『流動正義』は若干引きながらも、了承。  
元気よく頷く『人吉善吉』をみて、フォローしてやるか、とため息をついて、笑ったのだった。

ゆえに、今現在動物園にいるが——

やはり、というべきだろうか

彼女の前に、一匹たりとも動物がいない。

動物にとって彼女という存在は架空となるが、ゴジラと言えば正確にして違いはないだろう。

そんな少女は、やはり少女というべきか、少々泣きそうだった。

そんな少女をみて、正義は小さくため息をつく。

そして心配そうに少女をみる、善吉の頭に手をおいて、軽くなでて『なんとかする』といった意味合いを伝えて、ゆつくり

と歩き出す。

——だが流導正義といった存在も同じである。

めだかという存在がゴジラなら

正義という存在は、全ての兵器を持つ人間だ。

威圧感とともに、発展すればさらに強い武器が増えていく、そんな存在はやはり動物に怖がられる。

——だが、流導正義は、動物を抱えた。

理由は簡単だ。

安心させればいいのだ。

人間でも動物でも同じだ。

巨大な大国と、弱小国家、ハッキリいつて弱小国家はおびえるのみで、で

きれば関わりたくないといったものが当然だろう。

それは『戦えば制圧されているのが目に見えてる』といったところが主だろう。

だがしかし、それには裏としてもう一つの意味がある。

——そう、『仲良くできるなら利益的に高いものがある』という意味だ。

強い国家だからこそ、弱小国家に手を差し出せば、恐らくは疑念がわくだろう、『何故?』というものだ。

利益が平等になれば、その疑念はいくらでも湧くだろう。

ならば利益を見出して提示すればいいのだ。

流導正義りゅうどうせいぎは、幼くして今現在悲しんでいる少女

を慰めたい、そんな真心をもって動物たちと同盟を組んだ。

動物にはその気持ちは理解できるかどうかは不明だ、だが本気でそう思っているであろう目の前の人物の心は動物たちは人よりもはるかに読み取ることができる。

それにより、動物、小さな小さな動物は一步だけを踏み出した。

——それだけで十分だ。

慎重になるのは当然なのだ。

巨大な存在が弱い存在を仲間に迎えるのに必要なのは

『平等な利益』と『優しさ』だ。

その動物の頭をゆつくりと撫で上げていく。

その小さな動物は気持ちよさそうに鳴いた。

それだけで十分だ。

それだけですべての動物は一気に安心していく、たしかに警戒心をいまだ

持つような動物はいるが、それも時間の問題だ。

人というものは集団でいかなければならないものだ

集団によって生かされている

それは動物でも同じだ

一匹狼というものがあるが、結局は集団で孤立しているだけであって全人類という集団では、一部になってしまう。

生きるということは、その集団にあり続けるということだ。

正しさや悪さは特にどうでもいいとして、そこにあり続けなければいけないという生きているものの本能として

集団に少なからずとも流されるのだ。

故に——だんだんと、遅くとも、たくさんの動物は目の前の少年に心を許したのだ。

「よし…かわいいな。」

そういつて軽く撫で上げると、泣きそうになっている少女へと

正義は近づいていき、ポンツと手渡しておく。

「え…？」

目の前に収まる存在に、ビクリと少女は驚きながらも、ただゆっくりと、震える手で撫で上げる。

——そして逃げ出さないと理解した時に、パアッとその笑顔は花開いた。

「正義ッ！」

「ああ」

「善吉ッ！」

「うん！よかったねめだかちゃん！」

「ありがとう！」

嬉しそうな顔の少女に、善吉と正義は顔を向い合せて笑う。

「ねえねえ、正義くん、どうやってやったの？」

「そつだな、心を伝えればいいんだよ。」

「心を伝える？」

聞いて、わからなそうに首を傾げた少年に、正義は苦笑しながらも、頭をくしゃりとなる。

「たとえどんな生き物でも、辛い日々を過ごしていても、どんなに警戒心をもっているても、『信じられるやつは信じられる』だからそう思わせるほど優しくなればいい。」

「…うーんよくわかんないや、でも…」

「でも？」

「めだかちゃんが笑顔なら、それでいいや！」

そんな善吉ぜんきちに、正義まさきはクスリと笑い――

「ああ。」

小さく、そう返した。

## 番外編みたいなもの（後書き）

あれ、読んだら感情なくした自分の選択が馬鹿げた選択に思えてきた。

メモ帳からのコピペですので、ちょっとズレがあつたら報告をお願いします。

主人公は改神モードになると、感情ないけどあるっぽいような状態になります。

今と過去を足して二で割った状態です。

そういう設定ですが受け入れられますか？

あと、この作品の主人公勢はさらに増えます。

最初に雲仙姉をいれようかと思つたら数字言語がわかりません。

知っている方がいれば教えてくれるとうれしいです。

## 安心院なじみ？（前書き）

骨が折れた

いや、まあ表現ではあるけど

安心院さんの口調的な意味で

リアルな話でもある

合宿で、最終日気分転換的なものをする事になって

：利き腕の逆でかくと疲れるから略す

利き腕が折れた、帰ってきて気づいた

兄さんの言葉で病院

折れとつた、右腕

安心院さんの口調に迷っていると兄さんが一言

「言葉が終わって最後に。。。が言っただけで書けばそれっばいだけで受け入れられる」

はっちゃけたよ兄さん

今日連続投稿になります。

まあ兄さんに合宿中に携帯で書いてた書きかけの次の話を渡して流れを説明して書きなおしてもらったただけですけど

安心院なじみ？

真っ白な教室に、りゅうどうせいぎ流導正義はたたずんでいた。

「やあ」

その声に振り向くと、そこには美が付くであろう少女がいる。  
その少女をみた瞬間に、まさき正義はゆっくりと動きだし、椅子に座りこむ。

「返してくれないのかな？」

「はじめまして。」

「うん、はじめまして。」

そういつて少女はニコリと笑みを絶やさずに礼を返し、まさき正義はそっけなく脳内で能力を使い、解答する。

——ここはどこ？  
教室。

それはそうだ、と解答する意味のなさをまさき正義は感じて、『アブソリュートサー絶対解答』の能力を止めた。

りゅうどうせいぎ「流導正義」

「うん、僕は安心院あんしんいんなじみっていうんだ。親しみをこめて安心院あんしんいんって呼びなさい？」

そういつてにこやかに人差し指を立ててそう返す少女に、やはり正義まさきは何も感じない。

いや何も感じないというわけではない、ただ、この場の少女なしみと話を  
する理由が見当たらぬ。

それよりも、脳が『この少女とかかわらないほうがいい』と言っているが、しかし…逃げる方法が見当たらぬ。  
外に出てみるか？リスクが大きい。

「どうしてここに」

だからこそ正義まさきは一つ聞いてみる。  
そうすれば少女なしみは頷いて問いを返した。

「君とあつてみたくてね。君を引き込ませてもらつたよ」

「そう、何か用事が。」

「そうだね、とりあえず話してみたから——なんでもいいんだよね、話し内容は、そうだ、君が今後関わるであろうフラスコ計画というものを教えてあげようかな？」

「…フラスコ計画？」

「そう、まあ簡単に言えば『異常アブノーマルから天才アブノーマルを作る』といった感じだよ、つくられる過程では何人壊れるかはわからないけど。」

「そうか。」

「驚かないんだね？君の妹…志恩ちゃんしおんだったかな、その子も実験台になるかもしれないよ？たしかに天才てんさいといえるけど、さらなる天才アブノーマル

才を作る実験台にね？」

「そうか。」

「妹が実験台にされれば、不利益を被るかもしれないよ？」

「そうか。」

「できれば、その余裕を教えてくださいませんか？」

その言葉に正義まさきはふうと息を吐き、何も映し出さない瞳でまっすぐに少女なしみをみる。

「そんなものは治せばいいだけの話だろ。」

「ふふっ気づいてたんだね。」

正義まさきが多種多様な異常アブノーマルを持っていることは、この安心院あじむなじみも知っているわけだ。

そして彼が仲間にして中学時代の仲間——この仲間は、まるで神によって集められたかのようなものだった。

— アブノーマルアンサー  
— 『絶対解答』  
— シーキングハンド  
— 『全ては掌の中』  
— プラッディネオテニー  
— 『禁色幽閉』

この三人の能力を使えば——簡単に治せる。

全てを掌握する手は、脳の電気信号でさえも掌握し

解答は知識さえあれば研究すらしてなくとも答えを見つけたし——  
感情を封印するものは、操ることができれば、変更による苦痛さえ

も無効化する。それは貯蓄であり全て引き出せば死ぬかもしれないが——それは何があるうとも『貯蓄』であり全てを引き出さなければいけないというものではない。

そして解答——

『治せる』

「でも知識がなければ治せないぜ？君にそれほどの知識があるのかい？」

「『知識がなければ利益など出ない』」

「——そうだったね。矛盾した思考を持ちながらも君は利益主義者だったね」

そういつて黒髪の少女、安心院なじみは笑みを絶やさずにそう言い放つ。

先ほど言った通り、正義はすべてまことのことに精通している。

いや……全てに対して進化しているといったほうが正しいだろう。おそらく彼は専門職の能力でさえも応用し、さらに上を行く——そんな存在であり、力をだせば永遠に疎まれることは間違いない。

——それがないのは、ひとえに救うというまっすぐな存在と、驚異的なまでの存在感がありながら、驚異的な存在感のなさをもつ、矛盾し続ける存在であり、人には到底理解しえない存在ということからくるだろう。

「君の強さの部分はめだかちゃんと反対なんだね。めだかちゃんは感情があり、その心が強さの鍵のようなものだけど、君は感情がないからこそまっすぐでいられる。」

めだかちゃん、という名前に、ピクリと反応を示す。

おそらくそれは反射的なことだったのだろう、記憶にないというのに反応を示しているのだ。

…だが今はそれはどうでもいいと正義は判断した。

それは良かったことなのだろうか

いや、このとき追求すればよかったかもしれない。

「もう帰っても？」

この異常な空間と、関わってはいけないという本能からくる言葉  
それにより問いただすと、意外にも目の前の少女は頷いた。

そして、正義は教室の外に出るように、ドアのほうへと歩いていく。  
その背中に向かって、安心院なじみは声をかける。

「ふふつ、君とはまた会いたいね。」

「断る。」

「つれないね。」

そういつてクスリと笑う声を聞きながら

もう会いたくないと本能で叫びながら――

会の日は近い

黒神めだか？（前書き）

でもコピペはできるから兄さんに頼んで書いてもらいました  
連続投稿です。

この作品初、一日で二回

黒神めだか？

― 香月四季 かつぎ しき

アブノーマル ダークヒーロー  
異常名：暗黒英雄

身長は180を超える少年が、その光景に出合ったのは、入学してから幾らか日が立った後だった。

「まったく人使いが荒いよなここのやつら。」

十三組——それもまともに登校するのが我らがメンバーとクラスメイトの黒神めだかといった少女ぐらいた。

流導正義りゅうどう まさよしは、登校義務がないと分かったら、アルバイトといったもので将来的にお金を稼いでいる。

…雰囲気は、『知らないものを怖がる』人としては不気味だと感じられるために裏方をやっているのを聞いたことがある。

結局言えばクラスメイトの人数が少なすぎる上に、四季しき以外は女性であるために全て四季自身がやっているのだ。

とはいえどもここまで捕まるのは始めてのことだ。

ここまで捕まる可能性があるということに、少しばかり手伝いが欲しいな、などと思って香月四季かつぎ しきはため息を吐いた。

そしてふと——耳へと入る音に気付いた。

「…なんだ？」

ドドドドッ…という、まるで殴り合いをしているような音。

ダークヒーローとはいえ、信念で人を助けることを誇りをもっている香月四季<sup>かつきしき</sup>は、本能的にそちらの方向へと走り出す。

——そしてみたのは、戦っている男女。

美女と野獣——いや、好きあっているわけでもない上に逆に殴りあっているけれど、そんな単語が浮かんだ。

黒神めだか——つまりはクラスメイトと、無駄にでかい男がなぐり合っている。

しかも互角にだ、…そこはまあ別に驚くことではない、十三組にいる時点でこういった常識が通用しないことは理解していた。

だが、目の前の光景が香月四季<sup>かつきしき</sup>には許せなかった。

殴り合いが許せないなどといったことはないただ——

「「なっ!?!」」

「公共物破損はいけない」

——なぐり合っている場所が、みんなが使う学校ということが許せなかった。

しかもすでに罅すら入っている。

だからこそこの戦いをとめるために、香月四季<sup>かつきしき</sup>は二人の殴りあう腕を止めた。

「お前らの殴り合いは信念のぶつかり合いだと殴りあっている光景で『わかる』、正義とか悪とか、どうでもいい。俺の信頼できる仲間」がいつていた『正義とか悪とか考える前に信念があるかどうかだ』…色々とねじ曲がって覚えているが——だからこそ信念のぶ

つまり合いであるお前たちの戦いは俺に止める権利はないことは理解している。」

「だったらお前は何故——」

「もう一度言う、公共物破損はいけない。」

そういつて、四季しきは、地面へと手を下す。

その瞬間に、ひび割れや壁の崩れはすべて無くなる。

「信念とかいう以前に『できるだけ迷惑をかけるな』外でやれ」

「——そうだな、たしかにそうだ。」

…どうやらこの男性は物分りが良いようだ、そう四季しきは考え、次にクラスメイトである黒神めだかへと向き直る。

「すまなかった。」

ちゃんと頭を下げてきていた。

…根がいい奴らだな、と四季しきは理解し、立ち上がる。

問題はないと判断したためだ、だから立ち上がり、帰るために玄関方向へと歩き出す。

「すまない、香月かづき同級生」

「…なんだよ？」

だが、後ろからの声——黒神めだかの呼び掛けにより、再び彼らを見ることになる。

「先ほどの言葉、良い言葉だった。誰の言葉だか聞いても良いか？」

「…ああ…」

——正直、四季しき自身、これを言ってしまえば正義まぎに自身に何かがあるであろうことは理解していた。  
だが、ここで適当な人の名前をいつたら、『自身みづかみが許せなくなる』  
今の自分がある、それを作り出した言葉だ。  
だからこそ、嘘はつきたくなかった

「りゅうどうていぎ流導正義りゅうどうていぎだよ。」

「——!？」

——その言葉を発した瞬間に、黒神めだかの表情が明らかに変わったことを四季<sup>しき</sup>は理解した。

故に『ああこれ以上はダメだ』という言葉が本能的に現れる。

だからこそ、自分の異常<sup>アブノーマル</sup>を香月四季<sup>かづきしき</sup>は行使し、限界までの筋肉を使い、人ならざるスピードで飛び出した。

「まってまってくれ！」

凜とあり続けている同級生<sup>くろかみめだか</sup>の懇願のような言葉を聞き、止まりそうになりながらも全力疾走を止めはしない。

正義<sup>まよひ</sup>に関することは嘘は付きたくないが——正義<sup>まよひ</sup>に対して面倒を作りたくはない、恩人であるからこそそう思える。

自分の短絡さを呪ったが、過去のことはどうやっても逃れられない。ならばよい未来を信じて突き進むしかない。

だからこそ走り抜け

肩で息をしながら家へと入り——

「同じクラスじゃねえか……」

明日から不登校が決定した

「生きているのか、正義……！」

追いつけなかったことが悔やまれるが、今現在めだかにとって、それは関係なかった。

そう、今まで見つけられなかった自分の大切なものが生きているとわかったから。

涙が流れてくるが、それをすぐに止めて立ち上がる。

向かう先は当然のごとく、幼馴染の場所へ

——彼女は、流導正義がどんなことになっているか知らなかった。

さて、めだかは――いまのまなき 真実を知った時、どう反応するだろうか。

黒神めだか？（後書き）

この時まで知らなかった理由は…すいません後で  
疲れるこれ

流導正義？（前書き）

どうも

骨が折れたから兄に書いてもらうしかないから

また兄です。

『最初や番外編なら軽く書けるけどお前が書いた後に付け加えるように書くとき非常に文章が不安定になるからやめてくれ』

って言われました

…ごめんなさい

っていうか800pt超えてるんですけど、何があっただんですか？  
どうかでレビューでも書かれました？

…そういつた記憶はないんですけど

…ぶっ壊れた人の題名変えるべきかな？  
なんかシニールだって言われました…

## 流導正義？

——学園長に呼ばれて、流導正義しゅうどうせいぎは学園長室のソファへと腰かける。

正義自身まじり、この学園長室へと入室してから気配を感じていたが無視をし続けていた。

——理由は簡単だ、必要がないからだ。

観察されている眼、おそらく正義以外まじりであれば不快であろうが、感情が皆無といえる正義まじりにとって、それは精神的に害をなさず、それはただあるだけだった。

目の前の学園長は軽快に笑い、目の前にワイングラスにはいったサイコロを出してくる。

「君にこうして足を運んでもらったのはほかでもありません、折り入って頼みたいことがあります」

「それは」

「私が主宰しているプロジェクト——私は便宜上、それをフラスコ計画と呼んでいます。」

「それで」

「流導くんしゅうどう、君は何故自分が優秀なのか——疑問に思ったことはありませんか？」

「ない」

「はは謙遜することはありません」

… 流導正義じゅうどう まねは、この目の前の老人の話に価値が見いだせない。  
真実しんじつに、流導じゅうどうは自分の異常アフノーマルを疑問に思ったことはない。

何にも虚無——まったくのゼロな自身まねがその身に存在するのは本能的な救済なだけだった。

だからこそ、全く何もない少年は、純粹といえは純粹かもしれないが、純粹というレベルではとらえきれない大きさに心に自分の脳に『救うための手段』としか刻まれていない。

だから——疑問など考えることもなく、彼は救うための能力まさき、手段でしかなかった。

だからこそ、その疑問は無意味だった。

——だがそれ以前の問題だ

この計画の根本的に嫌な予感しか感じられない

まるで、忘れている巨大な何かが裏に何かがあるかのように——嫌な予感しかしなかった。

「完全に異常アフノーマルの域です！！」

そう言い放った時に、流導じゅうどうは老人の話に聞き耳をたてる。  
無駄な時間がほぼ終了したと考えたからだ。

「だから」

「では流導くん——ひとつ老人の実験に付き合ってくださいですか？…」

そこにあるサイコロを振ってください。もちろん、この計画へ介入することになれば、ある程度の要求を呑むことにしましょう。」

流導正義りゅうどうせいぎがこれが本題だと理解し、出されているサイコロをグラスごと掴む。

——そしてそのまま、上へと遠心力を利用し上へと放り投げる。

遠心力により放り投げられたサイコロは、当然のごとく上に吹き飛んでゆく。

「……!？」

老人、学園町である『不知火袴<sup>しじふぬいはかま</sup>』が我に返る。

何が起こったのか、いまだに何が起こったかもわからない。そこに起こったのは『全て』だった。

今まで見てきた、サイコロの結果や、知らない結果、それらすべてが引き起こる。

冷や汗が流れ、頬へと流れ…顔から落ちる。

<sup>アブノーマル</sup>異常…いや異常でまとめていいのかわからない現象がそこにあった。

サイコロはすでにない

目の前で粉となって消滅した。

バラバラになつて空中に投げ出されたというのに空中で塊となり、高速回転し、消滅し——そして現れ

ひたすらに脳に処理を任せようとするが、追いつかない。

その時だった

黙っていた流導正義<sup>じゅうどうまねい</sup>が立ち上がったのは

無駄と思ったのだろうかと思い、押しとどめる声をだそうと袴が声を出そうとした瞬間に

ゴトリ、とその場に隠れていた『十三組の十三人』サーティン・パーティが倒れるように現れる。

それも、訳がわからないといった表情で

「これは…俺の『言葉の重み』…!?!」

——都城王土がそうつめくかのように言い放つ。  
その瞬間に『その言葉の意味』を袴が理解した時に、さらに困惑する。

「（…どういふことでしょうか…!?!）」

理解できない

いや、理解できないと脳が理解し、まったく動かない。  
何も考えることができなかった

「退室しても」

「え…ええ」

だからこそ——ここは押しとどめるべきだというのに、反射的にそういつてしまった。

「合格ならば電話を」

退出する前の、流導じゅうどうの声で袴はハツとする。

そして押しとどめる言葉を出そうとした瞬間に、ピシヤリとドアは閉まった。

それをみて、袴は開けかけた口を閉めた。

「ぐっ…」

袴がみれば王土は立ち上がっていた。  
自分の異常をぶつけ、相殺したところだ。

「アイツあえて無視してたっつーことだな、殺そうとした瞬間に無理やり押しとどめてきたもん」

高千穂仕種は苦しげにそういつてくる。

袴は、理解できなかった頭を切り替える

——そして、笑みを浮かべた。

包帯をまいた少女は、冷や汗を流すメンバーを見る。  
驚いていないのは、親友である少女だけだ

「（おいおい、あいつを制御できるとおもってたのかよこいつらは）  
」

そういつて、包帯で隠れた口元が笑みへと変わる

「（3年いっしょにいて俺に理解できなかったんだぜ？お前らにできるはずがねーよ）」

そういつて名瀬天歌は笑った。

## 流導正義？（後書き）

そついつているけど制御方法は簡単！  
利益を提示する！

閑話（その後のめだかと善吉、そして正義メンバー）（前書き）

ギャグを書いてみたい、そう思って口頭で言って書いてもらいましたとさ

これは本当に才能がないといえる。

…おかしい、絶対におかしい！

なんですか900pt越えて、原作入ったからですか!?

閑話（その後のめだかと善吉、そして正義メンバー）

ガヤガヤと騒ぐ室内に、ハアとため息をつく少年がいた。

『人吉善吉』

1年1組、黒神めだかと流導正義の幼馴染だ。

そんな少年は、持っている写真を眺めて、

「もうすぐ、10年かよ…！」

そう辛そうな表情でつぶやいた。

そこにうつっているのは、幼い頃の自分と、幼馴染である二人。

『黒神めだか』と『流導正義』

仲がよさそうな三人。

笑顔で、正義はそこにたっていた。

——そう、立っていたんだ

彼の家を黒神めだかと共に訪ねた時に、めだかにいった言葉通り、正義を探し続けてきた。

ニュースは毎日見続けていたし、研究機関なども調べつくし、危なくとも調べ上げるといった危険な綱渡りでさえもやってみせた。

だが——少年は、まったくといっていいほど足取りを掴めていなかった。

そして10年、自分のふがいなさにはいらだが、それを抑えて前を向く。

そう、正義アイツもいつていた

——諦める諦めないかなんて決断は中途半端にする前に限界ギリギリを狙ってやるものだった

中途半端で、ああもうこりやダメだなんていつて終わらせれば、最後までやって成功したやつがいて後悔することばかりだ。だから——まだ、終わりじゃないだろう人吉善吉。

ここで諦めたら正義まじきがでてきたとき、『まったく仕方ないなお前は』なんて言葉を出すに違いない。

——それじゃあダメだ、善吉おれは成長しなければ

正義アイツに沢山の言葉をもらった、沢山の努力するきっかけをもらった。たくさんの努力をした。

正義は優しく厳しい、だからこそ正義まじきに優しい言葉ばかりを言わせるような友達じゃあダメだと思うから。

正義の背中ばかりみるんじゃない、めだかちゃんと三人肩を並べて笑いあえる友達になりたいから。

「ねね、何見てるの♪」

横から言われる言葉にハツとしてみる。

そこにいたのは、見慣れた友人  
不知火半袖しらぬいはんそでだった。

「ああ、俺の幼馴染だ。」

「へーお嬢様以外の人って誰なの？」

「流導正義りゅうどうせいぎ、俺とめだかちゃんの幼馴染で、俺の目標でもあ——つてなんだ？」

ドドドドっという音が響いていることに気づき、説明を止めて善吉ぜんきちは周りを見回す。

見回して音がする方向を知り、そちらのほうからやってくる存在をみて——

「善吉いいいいいいいいいいい！」

「めだかちゃゴフウツ!?!」

瞬時に吹っ飛んだ。

さすがのクラスメイトでさえもこの光景には啞然とし、ガヤガヤと騒ぎ出す。

善吉ぜんきちは腰に抱き着いて離れない幼馴染からどうにか逃れようとするが——

「正義は生きているぞ！」

——めだかのこの言葉でかちりと固まり——

「本当かめだかちゃん！」

すぐに思考が始まり、めだかの肩をガッチリつかんで聞いた。

「ああ！詳しい話は聞けなかったが生きているという確証は掴んだ！」

その言葉に底知れない喜びが浮かんできた。

しかも話は聞けなかったということは知っている人がいるということだ。

だから――

「今すぐ話を聞きに――」

「えーっとお嬢様あ？」

「む、ああ不知火か、すまないが相手をしている暇は――」

「その流導正義（りゅうどうせいぎ）っていう人のことしってるのになーって」

「それ本当か！？なんだよそれ教えるよ！」

不知火の発言に善吉（ぜんきち）が速攻で反応する。

黒神めだかですえも高速で振り向いているのをみて、不知火（しじゆい）半袖（はんそで）は面白いものを見つけたといわんばかりにニヤリと笑う。  
そして詰め寄ってくる善吉（ぜんきち）の手を叩くと笑いながら

「お嬢様は別にいいんですけどー人吉♪」

「…なんだよ。」

「教えてください、だろ？」

キリッとした表情でいつてくる半袖はんそでに、ちょっと引き気味になるが、善吉ぜんきちはすぐに表情を戻し――

「「教えてください！！」」

気が付けば必要はないといわれた黒神めだかでさえも頭を下げている。  
ついていた。

――クラス全員が、「（なんだこいつら……）」と思ったのは当然のことだ。

流導正義りゅうどうせいぎは今まさにアルバイト中である。

そしてその隣にはメンバー全員がいた。

次の日になり、不登校が決定した四季しきが流導りゅうどうに頭を下げて、アルバイト紹介をしてもらったのだが、ここで一つ問題が起こった。

そうメンバー全員仲良くしゃべっている光景を黒神めだかに見られているのだ。

そのことに気が付いた香月四季かづきしきは焦りながらもメンバー全員に頭を下げたのだが、そこで色々と起き、最終的にはメンバー全員で同じアルバイトをするという結果になった。

そしてアルバイトをしているわけだが、その原因でもある四季しきはバツと何かを感知したかのように振り向いた。

「…どうしたの？」

作業がある程度終わったのだろう、軽く休憩をとっていた桔梗ききょうに、不思議な顔をされて、四季しきは答えた。

「なんかさらに深刻な事態になった気がする。」

「…え、なにそれ。」

あからさまに嫌な顔を四季しきへと向ける桔梗ききょう。

「い、いや仕方ないだろ、過ぎ去ったことは見ずに良い未来になるために努力するもんだろ！？」

「いやそれは……」

その言葉に綾芽<sup>あやめ</sup>が口はさみ、四季<sup>しき</sup>の視線は綾芽<sup>あやめ</sup>へと移る。

「この原因を作った人が言うものじゃないと思う」

これが漫画だったら思い切りザクツという文字が空中にでていただろう。

心に矢が突き刺さった四季<sup>しき</sup>は頼みの綱となる正義<sup>まよひ</sup>へと視線を向けた。

「な、なあ正義<sup>まよひ</sup>だったらどうする？」

解答を求められた正義<sup>まよひ</sup>は、黙々と作業をし続けた手を休めずに、四季<sup>しき</sup>をみて――

「流れに身を任せる。」

「そつだよなーそれで未来を――」

「それで」

それで、と続けられた言葉に四季<sup>しき</sup>は嫌な予感しかなかった。

最初の言葉に逃げ口を一つ見つけられたからこそ、嫌な予感は逃げ道をふさぐ可能性しか感じられない。

「面倒事があつたら四季<sup>おまえ</sup>を盾にする。」

原因はお前だろうが、お前が盾になるのは当然だ、といわんばかりな発言。

桔梗と綾芽はその場で吹き出しそうになるがそれを押しとどめた。

そして四季は固まった。

正義は真っ白だ、純粹を通り越して何もないと言える、だから『冗談は言わない』ということだ。

つまり――

「（俺は盾にされるってことか…！）」

本気で面倒事を押し付ける気である。

## 流導正義？（前書き）

ごめんなさい、遅れました。

その上に文章は書きなぐった感がある感じです。

受験につかれているわけでもありません、はつきりいつて志望校の過去問は全部合格点を大幅に超えましたし、偏差値も6Xと志望校は超えましたし

でも兄さん曰く『たとえ可能性100%でも落ちるときは落ちるのが大学受験』らしいので勉強の手はゆるめませんが。

ごめんなさい、今回は短いです。

ちよ、ちよつと1000pt越えたってなんなんですか。

この臆病者ザ・チキンに何をお求めですか！

## 流導正義？

——時は過ぎ、正義のもとに一本の電話がかかってきた。

それは当然学園長のもの、その受話器を耳に当てて学園長の声を聞く。

学園長は端的な話、

『力を貸してくれ』

『明日には学園長室に来てくれ、話がしたい』

という2点を言って、電話を切っていった。

終わった電話のあと、時間を確認しようと正義は後ろを振り向くと、いつのまにいたのか、志恩しおんが立っていた。

「お兄ちゃん、もうすぐアルバイトだよ？ああもう本当に時間が無くなっちゃうな、お兄ちゃんといっしょにいられる時間が、でもね私は構わないよ、だってお兄ちゃんのことを私がずっと思っていて、お兄ちゃんが私のことをずっと思っていてくれたらそれはもうずっといっしょに同じだものね？つながっているんだもん、最高の繋がりだね？兄妹じゃない繋がりだね、誰も切れないんだから、だからお兄ちゃん終わったら早く帰ってきてね、たしかに思いつてたらずっとつながっていられるけどふれあっていられないじゃない、お兄ちゃんは私がずっと一緒にいなきゃダメなんだよね。」

「……いつてくる。」

「うんいつてらっしゃい、ふふふつまるで夫婦のような軽やかさだったね、本当に夫婦になれるかも、でも血の繋がりがあるからな、

どうしようかな？でも関係ないよね愛し合ってるんだもん」

志恩しおんの長い言葉に端的に一言で告げる。

それは、無表情で、冷静な返答だったと思う。

だがしかし、周りの正義まことぎという存在に慣れている人々は感じ取っていた。

それは本能

——歩いて外へと向かう正義まことぎの額に冷や汗が一筋垂れていた

本能で感じ取っていたのだろう、妹が最近危険、と。

アルバイト中、雇ってくれている人物へと声をかけて、理由を説明する。

学校のほうが厳しくなっていたので、シフト自体を少なくしたい、という要望だった。

それについては、やはり困ったように頭を掻いていた。

「んー、いやまあ学校関係ならいいけど、できれば代わりの人が欲しいなあ」

名前は『一之瀬 勇氣』。

妻子もちの社会人であり、アルバイトを雇えるほどの店のオーナーでもある、が、雇えるほどだからこそ困ったことは多々ある。

この店は異常なほど忙しいことで有名な店であり、アルバイトで入った学生が辞めてしまうことも珍しくはない。

最も迷惑なのは仕事のシフトがはいつているのに逃げるような人間だ。

そんな人間を彼はよく見ていたし、だからこそアルバイトを信じずにほとんどのことを彼ひとりでやっていたわけだが、やはり限界はあるようで、倒れそうになった時やってきたのが流導正義だった。

そう、それはまるで運命の出会いだったと彼は語る。

見た目がちょっとあれだったが、苦しかったのもあって採用してみると、これが異常なほどに仕事をこなす、自分自身以上でありながらまるで自分がごとく。

そして彼が連れてきた人々の力強さも本当に感謝している。

だからこそふと気を抜けば、まるで土砂崩れのように、貯めていたものが全部だされ、勇氣は病氣になってしまったわけだが――

だが、それでも勇氣は安心して任せることができた。

だが今、その中心である正義のシフトを少なくするという提案はちよつとだけ不安だ、だからこそ彼の知っている人、正義の連れてきた人々全員がすばらしかったからこそその信頼だった。

そしてお願いされた正義は少し考えて――

「明日までに」

「よろしく頼むよ!」

正義まさはりの返答に勇氣ゆうきはホツとしながらも、元氣よくお願いをする。

勇氣ゆうきにとって正義まさはりとは、真っ白で何もないけれど、だからこそ人の嘘うそというものがない、信賴しんらいできる人物だった。

「では」

「うん、さようなら。ごめんね、僕がやればよかったのに。」

歸りゆく正義まさはりの背に、勇氣ゆうきは謝りの声をかけるが、正義まさはりは無表情で一言返答する。

「いえ」

「うん。」

小さな時間でも、辛かった日々が嘘だといえるほど、勇氣ゆうきの心は穏やかになっていた。

正義まさよしはアルバイト終了しての帰り道、手帳を取り出して見てみる。  
そこには13組全員の電話番号が書いてある。

『あそこにいた』13人はダメだろう。

そのために手帳の中の13人は除外する。

そして見てみるが——ふと目についたものがあつた。

『穂村ほむら あかり』

入学式を思い出す、まるで自身がいない子のように小さく小さく  
なっていた少女だった。

——決めた。

そう思って彼は明日、学園長に住所を聞こうと思い、家路を歩き続  
けた。

## 流導正義？（後書き）

はい、短いですね。

ごめんなさい、これは次の話にでてる

『穂村あかり』という人物に出会うためのつながりの話です。

ついでに穂村あかりは元々のコンセプトである『苦しむ異常を救う』アフノーマルというコンセプトを忘れないためにやろう！というものです。

12日たったのに短いと感じられる方がおられるでしょうが…

次は、普通になると思います。というか最初のほうは出来上がってますので早く仕上がると思います。

今回遅くなった理由は受験も関係ありますが、骨を折ったための治療や、家族、私は受験なのでいけませんでしたが、父の弟、叔父になるんでしょうかね？

に呼び出され、土下座しながら借金があることを打ち明けられたりして、肩代わりしてくれと言われて、兄が『妹の受験期になにいてんだテメエ！』とブチぎれて殴る、といった騒動がありますが、兄は『いいネタがキター！』とか叫んでいたので、収束はもうできたと思います。

## お知らせ（前書き）

間違いを謝ろうとする今回に

どうしようもなく短いからって何かを突っ込んだら

どうしようもないほどに馬鹿なことをした気がする。

## お知らせ

間違いが発覚しました。

ハイ、学年などの設定を間違えてました。

設定ミス、というより自分の欲望を無理に押し通そうとした結果です、すみません。

めだか（一年）

くじら（二年）

なのに流導が同じクラスはおかしいですね。

うわああ、穴があつたらダイブして一生出てきたくない！

…ということとその間違いの修正とともに受験などでものすごい遅れます。

でも、がんばります、速効で片づけてきます。

推薦利用なので早く終わりたいです。

## お知らせ（後書き）

### 【次回予告（偽）】

注意：作者がお知らせだけで終わるのはダメだろうと、受験中のくせに授業中にノートに書いた嘘予告。

——たぶん火に油

——なにが正解で

なにが間違いなのか

彼ら、彼女らの心の中にそういったものはない。

：ただ、思いがあつて、ただ一緒にいたいと思ったからだから今の彼らがあり——彼女らがある。

——『私は劣等感を感じず』

——『俺は信念を知り』

——『私は共にいても良いことを知り』

——『私は必要されていると知って』

——『僕は、ただ面白いから』

共に、いるんだ。

『めだかボックス』の世界の終点はない。

だが、めだかボックスの終点はある

そして、たどり着けば——人々の目にとまることはなくなる。

「たしかにめだかちゃんたちはジャンプの世界の主人公さ」

「けどね、この世界は似た世界であり、君たちはジャンプの漫画の主人公であり、この世界の主人公ではないのさ。」

「だったら、この世界はなにかって？」

「ははは、ここは言ってしまうば二次創作、というやつかな？」

「君たちはこの世界の一部のジャンプの世界の人間であり、この世界の人間でもある。」

「だけど彼は違う」

「だからジャンプのように、友情と努力さえあれば勝利できる、なんてことはないのさ。」

——だから

彼はどうなるんだろうね？

——冷たい世界、雨音が音という音を飲み込んでゆく、そんな世界に。

長髪の少女が、傘も差さずに、雨水を滴らせながらゆっくりと歩く。

「ねえ——」

真っ白な髪、瞳に映し出すのは彼のみ

「アダムとイヴは結ばれるんだよね？」

<sup>アブノーマル</sup>異常を超えるほどの天才を秘めた彼女は天才を<sup>アブノーマル</sup>異常へと変貌させて

「ああ——そうだったね、結ばれるのは二人でいたからかもしれない。」

「だったら、みいんな殺しちゃえばいいよね？」

「お兄ちゃん？」

——<sup>アブノーマル</sup>異常編の終点

——<sup>アブノーマル</sup>過負荷編の終点

——<sup>ノットイコール</sup>悪平等の終点

そして

——<sup>ゼロ</sup>虚無の終点

「——ね…え、おにい…ちゃん、ごめ…ん…ね」

すでに、声は弱く、力もなく。  
アブノーマル  
異常であり、アブノーマル  
過負荷でもあり  
ノットイコール  
悪平等でもあった彼女の声はかすれていく。

「わた…し、おに…ちゃん…の、こ…と、ひとりじ…に、した…か  
ったけ…ど、それより…も、好き…で、幸せになって…ほしいんだ  
…よ。」

だからね、お兄ちゃん。

私は、アブノーマル私の異常は、アンチミラクル『全能』なんだよ

お兄ちゃんが友情で治ることなんてない、奇跡なんて起きない

——だから

アブノーマル私の異常は、すべての奇跡を超えて

——それでも、必然と化す、私の力は屁理屈だらけの愛も正義も奇

跡もないけれど

それでも私はすべてを超える。

——だからね、お兄ちゃん

幸せになってね

——そしてぶっ壊れてしまった少年は  
治せるわけもなかった少年が

紡がれた。

何を書いているんだ私

## お知らせ？（前書き）

お久しぶりです。

明日天気になあれ、めんどいから単純施行で

あす てんきに なあれとあしたをあすにして

あすてな、という名前を作った、そんなネーミングセンスがない作者です。

まあ結構前に受験自体は終了して、小説始める手はずでしたが、色々…まあリハビリのようなものでしょうか、それをやっていて、もう普通にやっていけるほどになりましたので、再開します。

はい、再開しますが…『まったくかけていない』という惨状。

書いてはいませんが、という理由は二種のエンディングまでの道のりを考えてみました。

二種というのは

1『主人公がめだか・善吉と同年』（つまり元々の話の流れ）

2『主人公がめだか・善吉の一つ上』

という

自ら設定を間違えて、おかしくなってしまった年齢問題というものを利用して、二つの分岐、というものをしてみました。

やってみて、『なんでやったんだ』感が否めませんでした、ま、まあいいですよ！ハイ！

ちなみに1をやると名瀬さんの話をやや強引に変えます。

そしてエンディングが全面戦争というやや物騒な話になります。

…本当になんでこんな話を作った、と思いつつこれは最初につくってたりします。

2をやると、めだかの登場を先送りになります。

そのかわりキャラクターが二人増えます。

今現在は『異常を反射する異常』と『相手を思い込ませ、それを相手にとって現実とする過負荷』を予定しています。

が、さらに増えます。

ちなみにこちらだと主人公が救われます。

…もう忘れ去られているかもしれませんが、そんなものしるか！

お知らせ？

紹介すると

1つめは二次創作であるからこそ、その主人公であり主人公視点のないモブキャラであり脇役であり読者視点も可能な存在の<sup>じゅうじゅうまなき</sup>流導正義だからこそやろうとした物語です。

つまり、もともとの物語です。決して前のお知らせの嘘予告ではありません。

このエンディングを作るために色々とフラグを立てておきました。<sup>じゅうじゅうまなき</sup>流導正義というありえない存在がいたからこそその異常によるものです。

プロローグに完璧にかかわってきます。

2つめは前のお知らせの嘘予告に近いです。

主人公の存在がまたかかわってきます。

<sup>アブノーマル</sup>彼の異常についての真意というものをかかわらせてみました。

<sup>アブノーマル</sup>異常の真意といわれても、ただたんにめだかボックスというジャンプの世界という設定そのものをぶち壊す能力だけなんですからね。

これはプロローグには関係ないです。

ただたんにジャンプという世界そのものに対抗するだけです。

できれば1か2のどちらかをリクエストしてくれるとうれしいです。  
こなかったら1をやりますけど…

## お知らせ？（後書き）

さて、考えて紹介してみたものの

どっちもおもしろくなさそうな気がする。

書いてみなければわかりませんが…がんばってみます。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0981r/>

---

ぶっ壊れた人

2011年11月30日18時51分発行